

国立国語研究所学術情報リポジトリ

National survey of dialects on semantically related items in The Linguistic Atlas of Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 隆, KOBAYASHI, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001104

『日本言語地図』 関連意味項目の全国方言調査

—語史構成を目的とした、文献国語史との対照における
意味的視野からの必要に基づいて—

小 林 隆

要旨：文献国語史と言語地理学の提携により語史を構成するための基礎資料の一つとして、『日本言語地図』（国立国語研究所、昭和41～49年）の関連意味項目の全国方言分布を明らかにしようとした。

語史研究は、文献国語史と言語地理学とが提携して進められることが望ましく、その資料として、言語地理学では主に『日本言語地図』が利用されてきた。ところが、『日本言語地図』の解釈を文献国語史と対照すると、両者の間で語の意味が対応しない場合があり、この点について詳しく考えるために、例えば〈眉毛〉に対する〈まつ毛〉など『日本言語地図』の関連意味項目の方言分布をあらたに調査した。項目は主に身体名称の50項目であり、通信調査法により全国1400地点分の資料を収集した。

本稿は、この調査の目的と方法について論じたものである。

キーワード：『日本言語地図』、関連意味項目、身体名称、全国方言分布調査、通信調査法、文献国語史、言語地理学、日本語方言

National Survey of Dialects on Semantically Related Items in *The Linguistic Atlas of Japan*

Takashi Kobayashi

Abstract: This research aims at clarifying the nation-wide dialectal distribution of semantically related items, as presented in *The Linguistic Atlas of Japan* (1966—1974, The National Language Research Institute).

The study of lexical history can be better handled when it is based on both philology and linguistic geography. For this, *The Linguistic Atlas of Japan* has been used as a primary source in linguistic geography. When examining lexical items presented in *The Linguistic Atlas of Japan* with those found in philology, [some semantic differences can be noticed. For example, the lexical item *mage* means “eyelash” in philology, while it means “eyebrow” in linguistic geography. Therefore, it is necessary to view the distribution of semantically related items which are not found in *The Linguistic Atlas of Japan*, such as eyelash.

In this research, 50 such semantically related items, mainly the names of body parts were chosen, and a nation-wide investigation was carried out. The data was collected from 1400 local points using postally distributed questionnaires. This paper discusses the purposes of the investigation and the methods employed.

Key words: *The Linguistic Atlas of Japan*, semantically related items, names of body parts, national survey of dialects, survey by mail, philology, linguistic geography, Japanese dialects

はじめに

語史構成のための有力な方法の一つに、言語地理学がある。国立国語研究所が昭和41年から49年にかけて刊行した『日本言語地図』全6巻は、言語地理学的手法による全国的視野に立った語史の構成を資料的な面から可能にした。ところが、語史については言語地理学以前に文献国語史の方法が行われていた。そこで、『日本言語地図』による推定と文献国語史の結果を対照する試みが起こり、現在までいくつかの成果があげられている〔文献6の目録参照〕。筆者は双方の成果を正面からつきあわせ両者の統合から一つの語史を構築することが最も有効なのは中央語史であるとの判断から、主に中央語史について対照的試みを行ってきた。その理論的・方法論的側面については〔文献10〕に述べたので、ここではくりかえさない。

ところで、『日本言語地図』の項目選定にあたっては、文献国語史的観点が希薄であった。少なくとも、文献国語史との対比の上で興味深い項目を積極的に取り上げようとする姿勢は弱かったと言える。これはもちろん、研究の順序としてまず方言上興味深い項目からという方針によったためであり、それを批判するのはあたらないだろう。しかし、その後『日本言語地図』の項目についてさえ、文献国語史との対照作業を進めてゆく段階で、さらにこういう項目の方言分布もわかっていれば、語史構成においてもっとつっこんだ結論が得られるはずだという関連項目が現れてきた。特に、多様な用例が存在し、意味的に広い視野をもちうる文献国語史との対応の上で語史を編もうとするには、言語地図の方でもあらたに関連意味の方言分布を明らかにし、意味的視野を拡張する必要がある。そのような意図に基づく調査は、『日本言語地図』の発展的な研究の一環として重要なものだと考えた。

そこで、『日本言語地図』の関連意味項目の全国方言分布調査を実施することとした。本稿ではこの調査の、主として目的と方法について、次の順序で述べたいと思う。

1. この調査がめざすもの……………23

1.1.	文献国語史との対照からみた『日本言語地図』の項目上の課題	23
1.2.	この調査の目的である関連意味項目について	27
2.	調査項目	30
2.1.	項目選定の手順	30
2.2.	調査項目とその通時的・方言的背景	32
3.	調査方法	46
3.1.	質問形式と参考語形	46
3.2.	調査票	48
3.3.	通信調査法の利用	61
4.	調査地点と回答者	66
4.1.	調査地点と回収率	66
4.2.	回答者の条件と実際の回答者	69
5.	調査費用	73

この種の調査報告一般とは異なり、1, 2においては調査の趣旨および調査項目の理由づけについて、かなりのスペースをさいた。それは、今回の分布調査が、単に地理的なバリエーションの上でもおもしろそうな項目を選んだのではなく、すでに触れたような、かなりしほりこんだ目的にそった調査であることを説明するためである。

なお、調査結果の地図化とそれを利用した語史の構成については、今後報告してゆきたいと考える。

1. この調査がめざすもの

1.1. 文献国語史との対照からみた『日本言語地図』の項目上の課題

この調査では、文献国語史との対照により語史を構成してゆく際の必要から、『日本言語地図』の関連意味項目の全国俚言分布を明らかにしようとした。

その関連意味項目について説明する前に、このような発展的な調査がなぜ必要なのか、文献国語史との対照を前提とした『日本言語地図』の項目の課題について以下に指摘してみたい。ただし、全般的なことについてはすでに別のところで述べる機会があったので〔文献10〕、ここでは現在の『日本言語地図』の項目と直接関わり、それを補足してゆこうとする立場からみて必要と思われる課題を、関連意味項目の調査ということも含め4つにしほって

取り上げたい。もちろん、それらの課題は言語地理学の内的反省によっても指摘されるものであろうが、文献国語史との対比によって、より明瞭に把握できたと考える。

【意味の場による項目】

『日本言語地図』に収められている285個の項目の選択にあたっては、それらの意味分野が各方面にわたるよう配慮がなされた。それだけに、この地図集の項目にはパラエティが認められるが、反面、分野ごとにトピック的な項目が選ばれ、分野内の網羅性に欠けることもたしかである。もちろん、『日本言語地図』が扱っていない意味分野もあるわけで、その方面の開拓も必要であるが、上の点からすれば、すでに取り上げられている意味分野の項目をさらに充実させてゆくことも考えてみなければならない。その場合、各意味分野といっても、それが広大なものである場合には補充すべき項目が無数にあり、結局つまみぐいの補足に陥ってしまう危険性がある。それを避けるためには、とりあえず対象とすべき意味分野を小さくしぼりこみ、その範囲内で網羅的な項目の補充を行う必要がある。

ところで、この部分的ながら徹底した意味分野内の項目補充は、文献国語史の要請にも応えるものと言える。すなわち、文献による語史研究においても、最近では同じ意味の場に属する項目をまとめて対象にすえ、語彙史を記述してゆこうとする立場が有力なのである。それは、前田富祺氏を中心に試みが続けられているもので、身体部位名などについて一連の成果があげられている〔文献18〕。

この立場にしたがえば、例えば足部という意味の場に入る名称の変遷について問題にするには、『日本言語地図』にある〈踵〉と〈踝〉の他、〈足の甲〉〈足の裏〉〈足首〉〈すね〉〈ふくらはぎ〉〈膝〉〈膝頭〉〈もも〉……などといった項目が必要となる。さらに、頭部、手部、胴部と意味の場を拡張してゆけば、最終的に身体部位という意味分野全体の名称を把握でき、それらの変遷を明らかにすることにつながる。このような意味的に系統だった項目の補足は、少なくとも各分野のつまみぐいの項目選択よりも、語彙史の記述的

体系性を満たしてゆくという点においてすぐれている。

【関連意味項目】

文献国語史との対照を進めてゆくと、『日本言語地図』のある項目に現れた語形が、文献では関連する他の意味でも使われていたり、あるいは関連しながらも意味が完全にずれてしまっているということがあった。これには、中央または地方における語の多義性や意味変化の問題が関与していると考えられるが、その点を明らかにするためには、文献で見られた『日本言語地図』の項目以外の意味についても方言分布を調べる必要がでてくる。

例えば、『日本言語地図』108・109図は〈下顎〉の方言分布を示しているが、そこに見られるアギという語形は、文献では〈上顎〉の意味で使用された期間が長く、しだいに〈下顎〉の意味の方へ移っていったことがわかる。また、アギトは、〈顎全体〉つまり上顎と下顎のかみ合わせを表すのが中心であったようで、しかも人間よりは〈動物の顎〉とか〈魚のえら〉の用法が多い。さらに、アゴタは身体部位そのものよりも〈へらず口〉の意味で使用された例が目立つ〔文献5〕。これらの文献に見られるアギ、アギト、アゴタの意味の多様性は、『日本言語地図』の2枚の地図のみからは、どうも知ることの及ばないものである。したがって、文献国語史との対照の際、顎に関わる語の歴史の意味的な視野を広げるためには、『日本言語地図』が取り上げる〈下顎〉の他、上で指摘したような関連意味についても方言分布を明らかにする必要がでてくる。そうした必要性は、つまり、名称の変遷を追いながらも、その名称として使用された語の意味の幅および意味変化にも注意を配り、他の名称の変遷との関わりをも一つの語史の視野にとりこんでゆこうとする考え方に基づいている。

ところで、そのような関連意味項目の中には、先に述べた意味の場の考え方でとらえることのできる項目も多い。例えば、上の〈上顎〉〈顎全体〉などの意味は、頭部の意味の場、あるいはさらにしぼって顎部の意味の場を形づくる項目を、少し詳細に選定してゆけばすくいとられるものであろう。しかし、〈動物の顎〉や〈魚のえら〉また〈へらず口〉などは意味の場の考え方で

はとらえることが難しく、そのわく組を越えた項目と言える。このような意味の場からはずれる項目の中には、例えばオモテという語における〈物の表面〉の意味のように、〈顔〉の名称がオモテ→カオと交替する際の重要な要因となったと認められるものもある〔文献4〕。それらの意味は、語彙体系内における語史展開の要因を考えると注目すべき項目と判断される〔文献7〕。

【関連形態項目】

上で述べた関連意味項目は、意味のつながりが密接に認められるものだが、そのようなつながりの範囲を越え、ほとんど関連を見出せないような意味関係にある同形ないしは類形の語でも、文献を調べてみると、語史の上で相互に交渉をもったのではないかと推定される語が現れてくる。そのような語の分布を調査するための項目が、ここで言う関連形態項目である（もちろん二つの意味のつながりをどの程度認めるかは判断が難しく、したがって関連意味項目との境界は不分明であるが、その問題は今は深入りすることを避ける）。

例えば、上と同じ〈顎〉を例にとれば、アゴという語形の成立にあたっては、〈鳥の蹴爪〉を表すアゴからの類形牽引が関与していると文献では考えられた。また、『日本言語地図』180図〈かぼちゃ〉にはポーフラという語形が見られるが、文献ではこのポーフラに、〈ほうふら〉のポーフリやポーフラが類形牽引と同音衝突という形で交渉をもったと推定された〔文献3〕。さらに、244図〈つくし〉のツクツクホーンの発生に対して、文献からは蟬の〈つくつくぼうし〉のクツクツホーン、あるいはツクツクホーンが関わったと指摘されている〔文献12, 126ぺ〕。これら〈鳥の蹴爪〉や〈ほうふら〉〈つくつくぼうし〉などの項目についても調査を行い、文献上確認された類形牽引や同音衝突の現象を、方言分布の上からも明らかにする必要があると考えるのである。この関連形態項目も、関連意味項目同様、語史における語彙体系内の変化の要因を知ろうとする際に重要なものと言える〔文献7〕。

【文体的項目】

以上の3つの課題は、いずれも語彙の体系性という観点から生じたもので

あり、語の意味の内包に関わることであるが、さらに語の文体的な側面についても調べたいことが現れてくる。

さて、『日本言語地図』が載録していることばは、「日常のくつろいだ雰囲気の中で親しい人々と話す時などに使うことば」〔文献1, 1ペ〕であり、つまり文体的な価値の点では中立的ないわばふつうのことばが対象とされている。したがって、とりわけ上品なことばやぞんざいなことばは、基本的にこの地図集からは漏れていることになる。また、話しことばと書きことばという観点からは、少なくとも書きことばの様子を知ることができない。

もちろん、すべての名称に文体的にいくつかの使い分けが存在するということはなかろうが、それでも文献国語史と対照すると、例えば次のような具体的な問題が現れてくる。すなわち、〈家〉を表す名称について、『日本言語地図』からは、イエ→ウチという変遷が読みとれ、これは文献からも支持される。ところが文献ではウチが優勢になった後も、イエは全く滅びたわけではなく、文体的に高い価値を付与されて、改まった場面に現れてくる〔文献16〕。そうしたイエとウチの文体差は、『日本言語地図』からは見えてこない。また、〈顔〉の場合には、卑称として用いられ、カオと文体を分け合いながら共存しているツラの存在が、文献からは知られるものの、『日本言語地図』からは、〈顔〉の普通称がツラ→カオと交替したことが読みとれるだけで、ツラのその後の価値の下落を推定することができないのである。

『日本言語地図』は、文献に比して話しことばの歴史を積極的に扱える資料である点に特色があるが、反面、文体的な視野に乏しいことは事実である。その点、文献資料の方が多様性に富むと言える。文献国語史がもつ文体的な視野を『日本言語地図』にもとりこみ、文献国語史との対照の際、双方の語の文体的な対応を明らかにするためには、一つの意味について複数の文体で調べることでできるような工夫を調査項目にほどこす必要がある。

1.2. この調査の目的である関連意味項目について

以上の課題の中で、今回焦点を置いて行おうと考えたのが関連意味項目の調査である。くりかえして述べることになるが、『日本言語地図』の各項目

について名称の変遷を追おうとする場合、その名称として使われた語の共時的・通時的な意味の広がりをも把握し、さらに意味にからむ名称交替の要因まで探ってみたいと考え、先に例示した〈顆〉の場合のように、あらたに方言分布を知りたいと思う項目が多く現れてくるのである。そのような項目は、当然のことながら関連形態項目や文体的項目に比べ、『日本語地図』のどの項目をとっても指摘されるものであり、筆者がこれまで行ってきた文献国語史との対照作業の乏しい経験においても、問題点を意識することが多かったわけである。

さて、次に、『日本語地図』と中央の文献との間における語の意味対応についてモデルを概観しながら、今回の調査で扱おうとした関連意味項目とはどのようなものか、もう一度整理してみたいと考える。

下の図をごらんいただきたい。この図は、語 x の意味 α 、 β が、方言分布と中央文献とでどんな対応のしかたをしているか、主なパターンを示したものである。 α と β の意味のうち、 α が『日本語地図』の取り上げている項目とする。なお、 α と β は関連意味であるというだけで、さらに並立関係にあるか包摂関係にあるかなど細かい点は問題にしない。

まず、①のケースのように α の意味の『日本語地図』に現れた語 x が、文献を調べると α の他 β の意味でも使われているという場合がある。そのとき β の意味の方言分布にも語 x が現れるならば、文献と方言分布における語 x の意味は、一応の対応を示すことになる。しかし、その場合でも、文献の方で $\alpha \cdot \beta$ が通時的に平行して現れる、つまり多義的であるものがそのまま方言でも $\alpha \cdot \beta$ の重なり分布として見られるか、あるいは、文献で $\alpha \cdot \beta$ が通時的に交替して現れる、つまり意味変化であるものがそのまま方言でも $\alpha \cdot \beta$ の相補分布としてとらえられるかなどの問題が残る。また②の

		語 x の意味対応	
		方言分布	中央文献
『日本語地図』の項目	α	$\cdot \beta$	$\alpha \cdot \beta$ ……①
	α	—	$\alpha \cdot \beta$ ……②
	α	$\cdot \beta$	β ……③
	α	—	β ……④
	α	$\cdot \beta$	α ……⑤
		β	$\alpha \cdot \beta$ ……⑥
		β	α ……⑦

ケースのように、 β の意味の方言分布に語 x が現れてこないならば、語 x の β の意味は方言に伝播しなかったかあるいは伝播しても消滅してしまったかのどちらかであり、語 x は意味の縮小を起こしたことになる。

次に、③のケースのように、 α の意味の『日本言語地図』に見られる語 x が、文献では α の意味に使われず、 β の意味で用いられているという場合もある。このとき、 β の意味の方言分布にも語 x が現れるならば α の意味は方言において加わったのであり、語 x は意味の拡張を起こした可能性がある。また、④のケースのように、語 x が β の意味の方言分布に現れないならば、語 x は β から α へ完全に意味変化した可能性が考えられる。もちろん、これら③④の場合、位相的・文体的な偏りなどで文献が語 x の意味を十分反映していないと考えられるときには、逆に方言分布から中央における α の意味の存在を指摘することもできるはずである。特に α の意味が周囲分布を示すときにはその点が問題となろう。

さらに、⑤のケースのように、 α の意味の『日本言語地図』に現れる語 x が、文献でも α の意味で使用されているときにはそのかぎりにおいて一見両者の意味が対応しているように思われる。しかし、方言分布の上では、語 x は α の他 β の意味でも用いられているということがありうる。この場合、 β の存在は文献国語史からは見えてこないものであり、もし地方における独自の発生ならば中央語史とは直接関わらないけれども、③④のケースと同様、逆に方言分布から中央における β の意味の存在を示唆することも可能である。

最後に、⑥⑦のケースのように α の意味の『日本言語地図』には現れない語 x が、文献では α の意味で使用されており、方言分布にもどってみると、それは β の意味で見られるという場合もある。これらのケースは、基本的には②④と同様に解釈されるが、 α を表す語 x の存在が、『日本言語地図』からは見えてこず、文献によってのみ指摘されるという点において異なる。

さて、以上のような文献と方言における語の意味の対応関係を明らかにし、語史の構成に役立てるためには、上の説明における β の意味の方言分布を知る必要がある。そこで、 β の意味をあらたに項目として立てて調査を行

おうと考えたのであり、その項目をここでは関連意味項目と呼ぶのである。

2. 調査項目

2.1. 項目選定の手順

関連意味項目を洗い出す作業は、『日本言語地図』の全項目について行う余裕がなかったので、今回は、このところ興味をもって語史の構成を試みている身体関係の項目を中心に考えた。具体的には以下の項目について検討した（3桁の数字は地図番号）。

頭(101)・つむじ(102)・はげ頭(103)・はげる(104)・ふけ(105)・顔(106)・頬(107)・顎(108, 109)・目(110)・眉毛(111)・ものもらい(112)・唇(116)・舌(117)・唾(118)・よだれ(119)・指(126)・しもやけ(127)・蹠(128)・踵(129)・みずおち(130)・あか(131)・あざ(132)・ほくろ(133, 134)

この他、次の項目についても作業を行った。すでに、文献と方言の対照的研究が手がけられており、意味的な問題点が見えている項目も含まれている。

粃殻(171)・糠(172)・里芋(177, 178)・かぼちゃ(180)・とうもろこし(182)・とうがらし(183)・あぜ(187)・家(191)・とんぼ(231)・きのこ(245)・におい芳香(268)・におい悪臭(269)

さて、以上の項目について、原則として次のような手順で関連意味項目を探し出した。

A. 『日本言語地図』の凡例の語形について、文献資料で意味を確認する。

Aa. 文献資料でも同じ意味のみに使われているとき→そのまま

Ab. 文献資料では別の意味で、あるいは別の意味でも使われているとき

Ab_i. その別な意味が『日本言語地図』に項目としてとられているとき→そのまま

Ab_o. その別な意味が『日本言語地図』に項目としてとられていないとき→その意味を調査項目として選定

この過程によって、先に示した文献と方言の意味対応のモデルのうち①～④のケースのような関連意味項目を拾い出すことができる。さらに、⑤のケースのような文献には見られない関連意味項目を探すために、

B. 『日本言語地図』の凡例の語形について、『日本言語地図』以外の方言資料で意味を確認する。(以下Aの手順に準ずる。)

という手続きが必要になる。また、⑥⑦のケースのように、『日本言語地図』の凡例の語形からは指摘できない関連意味項目を探すために、

C. 『日本言語地図』の凡例以外の語形で、文献上の語史の一環を構成すると考えられる語形について、文献資料・方言資料で意味を確認する。(以下Aの手順に準ずる。)

というチェックも行った。

以上の手続きを具体例で簡単に説明しよう。まず、Aの手順について、『日本言語地図』の〈蹠〉の地図に現れたキビスは、文献資料では〈踵〉の意味でも用いられている。しかし、〈踵〉は『日本言語地図』にすでに項目としてとられているので、新たな調査項目とはならない (Ab₁)。一方、同じく〈蹠〉の地図のツブブシの場合、文献では〈膝頭〉の意味もあり、これは『日本言語地図』にはない項目なので、あらたに調査項目となりうる (Ab₂)。次に、『日本言語地図』の〈榎殻〉の地図に現れたスクモは、文献資料でもおおよそ〈榎殻〉の意味と対応すると考えられるが、方言資料ではさらに〈麦穂のくず〉の意味での使用も見られる。したがって、〈麦穂のくず〉を調査項目にできるわけで、それはBの手順によって可能である。最後に、『日本言語地図』の〈とんぼ〉の地図にカゲローという語は現れないが、文献では〈とんぼ〉の語史の一環を構成する語である。ところが、カゲローにはさらに〈かげろう (蜉蝣)〉の意味があることも文献および方言資料でわかるから、それを調査項目として立てうる。これが、Cの手順によってのみ拾いうる項目である。

ところで、上の手続きで用いた文献資料というのは、具体的な語史についての研究論文や筆者の収集した用例もあるが、それではどうてい必要範囲を

おおうことができないので、次の辞書を利用した。『日本国語大辞典』（昭和47～51年・小学館）、『角川古語大辞典』（昭和57年～刊行中・角川書店）、『古語大辞典』（昭和58年・小学館）、『時代別国語大辞典上代編』（昭和42年・三省堂）、『時代別国語大辞典室町時代編一』（昭和60年・三省堂）、『近世上方語辞典』（昭和39年・東京堂出版）、『江戸語大辞典』（昭和49年・講談社）。また、方言資料としては、『全国方言辞典』（昭和26年・東京堂出版）、『標準語引分類方言辞典』（昭和29年・東京堂出版）、『日本国語大辞典』の俚言についての記載、平山輝男『全国方言基礎語彙の研究序説』（昭和54年・明治書院）の他、広域言語地図を利用した。しかし、各地の方言辞典にあたるなど、詳しい調査には及べなかった。

2.2. 調査項目とその通時的・方言的背景

以上のようにして拾い出された関連意味項目は、かなりの数にのぼる。しかし、一回に調査しうる分量には限りがあるので、順次調査を続けることとし、今回は次に掲げる項目を取り上げることにした。それらは、主に筆者がこれまで文献と方言の対照から語史を構成しようと試み、問題点を認識している項目であり、まずそこから始めようと考えたわけである。

なお、関連形態項目も一部今回の調査で取り上げたが、それには*を付した。すでに『日本言語地図』にある項目で、設問の構成その他の理由からあらためて調査した項目には、その旨注記した。また、質問形式の点で、意味を与えて名称を回答してもらう方式の他、語形を提示してその意味を答えてもらう方式なども併用したので、以下ではそれらの方式の違いがわかるような項目の示し方をした。

〔 〕内には、今回の調査項目が『日本言語地図』のどの項目との関連で取り上げられたものかわかるように、関連する『日本言語地図』の項目名と地図番号を記した。

部位としての眉〔眉毛111図〕

眉墨としての眉〔眉毛111図〕

まつ毛〔眉毛111図〕

- マミの意味一目つき，目もと，目，顔つき〔眉毛111図〕
- マミエの意味一目つき，目もと，目，顔つき〔眉毛111図〕
- 顔面〔顔106図と重複〕
- 人相〔顔106図〕
- 表情〔顔106図〕
- 器量〔顔106図〕
- カオをスタイルの意味で使うか〔顔106図〕
- 下顎〔顎109図と重複〕
- 下顎の先〔顎108図と重複〕
- 下顎の脇〔顎108・109図〕
- 下顎の角〔頬107図，顎108・109図〕
- 上顎〔顎108・109図〕
- 顎全体〔頬107図，顎108・109図〕
- 歯茎〔顎108・109図〕
- 頬骨〔頬107図〕
- へらず口をたたく〔頬107図，顎108・109図〕
- おしゃべりをする〔頬107図，顎108・109図〕
- カマチとカバチの意味一顎の骨格，頬から顎にかけての骨格，上下の顎の骨，頬骨，口，戸や障子のわく木，床の端にわたす化粧横木，荷車などの両側につけるわく，ふち・はじ・すみ〔頬107図，顎108・109図〕
- 手首の関節〔踝128図〕
- 膝頭〔踝128図〕
- 膝〔踝128図〕
- *歩くことをアグオツルと言うか〔顎108・109図，踵129図〕
- *一歩歩くことをヒトアグアルクと言うか〔顎108・109図，踵129図〕
- *大またで歩くことをオーアグデアルクと言うか〔顎108・109図，踵129図〕

*何歩あるか数えることをアゴフムと言うか〔顎108・109図、踵129図〕

*またぐことをアゴムと言うか〔顎108・109図、踵129図〕

そばかす〔ほくろ133・134図〕

しみ〔ほくろ133・134図〕

はれもの・ふきでもの〔ほくろ133・134図〕

こぶ〔ほくろ133・134図〕

いぼ〔ほくろ133・134図〕

動物の顎〔顎108・109図〕

魚のえら〔顎108・109図〕

*にわたりの蹴爪〔顎108・109図、踵129図〕

牛馬のつむじ〔つむじ102図〕

粃殻〔粃殻171図と重複〕

糠〔糠172図と重複〕

粃殻と糠をまとめてヌカと言うか〔粃殻171図、糠172図〕

麦の実の殻〔粃殻171図、糠172図〕

^{おすま}麩〔粃殻171図、糠172図〕

スクモとスクボの意味—粃殻、麦の実の殻、稲穂のくず、麦穂のくず、
葦^{あし}や茅^{かや}などの枯れ草、葦の根、浜にうちあげられた海草などのくず、
泥炭、こまかい砂や土、土の中にいるせみの幼虫〔粃殻171図、糠
172図〕

山頂〔つむじ102図、頬107図〕

*辻〔つむじ102図〕

さて、次に、以上の項目の歴史的・方言的背景を簡単に解説することにより、これら項目を選定した理由について述べてみたい。『日本言語地図』の項目ごとに関連する項目をまとめて扱う。なお、文献上の語史記述あるいは文献と方言の対照的試みがすでに存在するものは、そちらが詳しい面もあるので、参考文献として掲げた論文もご参照いただきたい。

(1) 〈つむじ〉の関連意味項目〔文献11〕

『日本言語地図』102図にはツムジという語形が見られ、このツムジは文献においても古くから〈つむじ〉の意味を担っていた。ただし、人間の頭の〈つむじ〉のみを指したかというとはそうではなく、牛や馬のうずまきのように生えた毛もツムジと呼んだことがわかる。特に、中古の辞書にはツムジが牛馬の部位であることを重視した分類を行ったり、あるいは注記をほどこすものがある。同様のことは中世に入って登場するツジについても言えることで、馬に対して使われた用例や、馬について言うことを注記した古辞書が目立っている。このように、ツムジとツジにおいては〈牛馬のつむじ〉の用法も重要であり、あるいはそちらが本来的な用法であったことも考えられ、それが方言分布にどう反映されているかを見てみたい。

また、ツムジとツジには比較的新しい意味として、〈つむじ〉から派生した〈頭頂〉を表す用法がある。ツジの場合は、さらに頭のみではなく近世には物の〈頂点〉を一般的に意味するに至ったことがわかる。現代の方言においても、ツジは、〈つむじ〉の他、〈頭頂〉〈山頂〉〈峰〉〈こずえ〉〈物の先端〉などの意味で使われているようであり、これらの意味の変異と変化の姿を、方言分布からも確認する必要がある。

その他の102図の語形では、ギリギリにも文献上〈頭頂〉と認められる用法がある。また、マキメには〈指紋〉の意味があり、サラには〈頭の皿〉〈膝の皿〉を表す用法が文献にあるが、これらは方言にも存在している。

以上のような〈つむじ〉の関連意味項目のうち、今回は〈牛馬のつむじ〉と〈山頂〉の2項目を調査することとした。後者については、物の頂点一般を調査することは抽象的すぎて難しいため、〈山頂〉で代表させることにしたものである。ツムジ、ツジ、ギリギリの3者に関わる〈頭頂〉も採用しなかったが、これは101図の〈頭〉の関連意味項目を調べる際にまとめて対象とすることにした。

この他、関連形態項目として〈辻〉を取り上げた。〈辻〉を表す語形にもツムジ、ツジがあり、〈つむじ〉のツムジ、ツジとの間に歴史のおよび方言的な交渉が推測される。もちろん、〈辻〉と〈つむじ〉は物理的な形の類似性も

認められるため、意味の関連も見逃せない。

(2) 〈顔〉の関連意味項目〔文献4〕

『日本言語地図』106図は、「顔」と題されているが、「ここ全体のことを何と言いますか。朝起きたときに洗います。」という質問文から明らかな通り、身体部位としての〈顔面〉を表す俚言を地図化したものである。しかし、そこに現れるカオという語は、文献によれば他に〈人相〉〈表情〉〈容貌〉などの用法もち、現代標準語においても、「どんなカオか忘れた（人相）」、「驚ろいたカオをする（表情）」、「きれいなカオをしている（容貌）」のように使われている。これらの用法のうち、上代においては、カオは主に〈容貌〉の意味で使用されたと考えられ、特に『日本言語地図』が取り上げた〈顔面〉の意味は、カオが平安時代に入ってから獲得したものである。また、カオについては、『時代別国語大辞典^{上代編}』『古語大辞典（小学館）』のように、上代において体全体の〈スタイル〉の用法を認める辞典もある。

また、106図にはオモテ(UMUCI)という語も見られるが、文献ではカオと用法が全く重なるわけではない。このオモテこそ上代を中心に〈顔面〉を意味する語であったのが、平安時代に至り〈物体の表面〉を表す用法を派生させ、そちらの語義が主となった結果、カオが代わりに〈顔面〉の意味をもつようになったと考えられる語なのである。なお、〈物体の表面〉の意味は、後に、カオや次に述べるツラにも生じている。

さて、そのツラは106図では〈顔面〉の意味で載せられているが、文献では〈顔面〉を表す以前〈頬〉を意味していたことがわかる。ただし、この〈頬〉は『日本言語地図』にすでに項目としてとられている(107図)。〈顔面〉の意味に転じたツラは、結局カオと同様〈顔面〉以外にもいくつかの用法をもつに至り、その結果文体差を伴って併存することになるが、その過程においては、カオとの間に語義の違いも認められたにちがいない。

このようなカオ、オモテ、ツラの意味変化と、それらが〈顔面〉の名称として交替してゆく過程を知るために、今回の調査では〈顔面〉の他、〈人相〉〈表情〉〈容貌〉〈スタイル〉の意味を項目として立てることとした。これらの意味

での各語形の分布が補い合い重なり合う姿が、文献上の歴史と対応するかどうかを注目することになる。なお、〈顔面〉の意味は、106図の対象と重なることになるが、他との比較のため今回もとりあげた。質問は52ページに掲載する調査票を参照していただきたいが、例えば「毎朝～を洗う」のような例文を示し、その～部分にあてはまる言い方を尋ねた。また、〈スタイル〉については、カオという語形をこの意味で用いるかどうかについてのみの回答を求めた。

この他、次のような意味も文献に見られるが、今回の調査にはとらなかつた。カオの〈化粧〉〈顔ぶれ〉、オモテの〈物体の表面〉〈正面〉〈仮面〉〈面目〉、ツラの〈物体の側面〉〈かたわら〉などの用法。

(3) 〈頬〉の関連意味項目〔文献6〕

『日本語地図』107図にはホーゲタという語が現れるが、文献ではこの語は主に〈頬骨〉を意味する語であった。また、ホーゲタラタタクなど句の形で〈へらず口〉や〈おしゃべり〉の意味も文献に見られるが、それは方言資料にも存在する。

次に、カマチ、カバチについては、文献ではその部位が明確でないものの一応〈頬骨〉あるいは〈頬から顎にかけての骨格〉〈顎全体（上下の顎の骨）〉〈頭の骨格〉などを指したと考えられる。また、身体部位以外では、そこから派生したものとして〈戸や障子のわく木〉や〈荷車などの両側につけるわく〉、さらに〈床の端にわたす化粧横木〉の用法も見られる。一方、方言資料では〈頭〉〈顔〉〈額〉〈顎〉〈口〉の意でカマチやカバチを使用する地域があるが、そのうち〈額〉を除いては、すでに『日本語地図』に項目としてとられている。また、ホーゲタ同様カバチオタタクなどの形で、〈へらず口〉〈おしゃべり〉の意味をもつ地域もある。その他、文献に存在した〈戸や障子のわく木〉〈床の端にわたす化粧横木〉の意味は方言資料にも見られ、他に〈しきい〉〈かもい〉や、さらに一般的に〈ふち〉〈はじ〉〈すみ〉の意味でカマチ、カバチを使う地域もある。

続いて、ツラガマチ、ホーガマチも文献では、〈頬骨〉や〈頬から顎にかけて骨格〉〈顎全体〉を表す語と考えられる。さらに、ツラガマチには文献で

〈顔つき〉の意味も、ホーガマチには方言資料で〈下顎の角〉の意味も認められる。その他、ホーカイという語は、文献ではふつうの頬ではなく、とりわけ〈ふくらんでとび出した頬〉を指したのではないかと思われる。また、ピソタは文献で〈^{びん}鬘のあたり〉〈頭〉〈首〉〈平手打ち〉の意味で使われており、方言資料では〈鬘〉〈もみあげ〉〈頭〉〈はげ頭〉の他、〈山頂〉〈木のこずえ〉などの意味が見られる。さらにソッポについては、文献で〈横の方〉の意味が認められる。

以上〈頬〉について調べるべき関連意味項目は多岐にわたるが、今回の調査で取り上げたものは以下の通りである。〈頬骨〉〈下顎の角〉〈顎全体〉〈へらぞ口をたたく〉〈おしゃべりをする〉〈山頂〉。また、カマチ、カバチについてはその語形を提示し、次の意味で使用するかどうかを質問した。〈頭の骨格〉〈頬から顎にかけての骨格〉〈顎全体（上下の顎の骨）〉〈頬骨〉〈口〉〈戸や障子のわく木〉〈床の端にわたす化粧横木〉〈荷車などの両側につけるわく〉〈ふち〉〈はじ〉〈すみ〉。

これらの項目のうち、〈下顎の角〉〈顎全体〉〈へらぞ口〉〈おしゃべり〉は〈顎〉108・109図の、〈山頂〉は〈つむじ〉102図の関連意味項目でもある。なお、ツラについてはすでに〈顔〉106図のところで説明したので参照されたい。

(4) 〈顎〉の関連意味項目〔文献5・19〕

『日本言語地図』108・109図は〈顎〉を対象としており、特に108図は「とがった部分」の名称を、109図は「全体」の名称を地図化している。ただし、後者については、「全体」とは題しながらも厳密には〈下顎〉の部分の対象とされている。

さて、この2枚の地図には、オトガイ、アギ、アギトという語が現れ分布領域も広いが、これら3語は文献においても中世まで顎を表す語としての基本的地位を占めていた。その中でもオトガイが代表語であり、意味も109図の〈下顎〉と重なり、特に108図が対象としている〈下顎の先〉に焦点のある用法が目立つ。

これに対して、アギとアギトについては、文献上の意味がかならずしも

108・109図の意味と重なるわけではない。すなわち、アギは〈上顎〉つまり口蓋の部分を示す期間が長く、中世半ば以降〈下顎の角〉つまり現代俗にいうエラの部分を表す用法が生じてきたと考えられる。また、〈歯莖〉を表す漢字にアギの訓が付された例が古くあり、中古初期には〈魚のえら〉を意味した用例も見られる。また、アギトは、〈下顎の脇〉つまりちょうど頬杖をつくときに手のあたるあたりを指したり、あるいは上顎と下顎を合わせた〈顎全体〉の意味で使われていた。そして、むしろ人間よりも〈動物の顎〉や〈魚のえら〉を表す用法が中心であったと判断される。

こうした文献で見るアギとアギトの意味のうち、いくつかは方言資料においても確認される。なお、〈下顎の角〉については、『日本言語地図』の調査項目にも入っていたが、調査が不十分であったために地図の作製はなされなかった。今その資料を地図化してみると、アギを用いる地点がここにも現れ、さらに詳しい分布調査が期待される。

続いて、108・109図に広く分布し現代の標準語と言えるアゴも、最初は主に〈顎全体〉を表しており、しだいに〈下顎〉の意味を中心とするように変化していった。また、近世後期には身体部位としての用法を離れ、〈食事〉や〈食費〉〈雑費〉〈宿泊費〉また〈鉤状のもの〉〈鮫鱈〉など様々な意味を派生させた。さらに、同地図に見られるアゴタも〈顎全体〉の意味が最初で、そこから発せられる〈へらず口〉や〈おしゃべり〉の意味を生じさせ、特にアゴタヲタタクなど慣用句として固定化していったようである。この〈へらず口〉や〈おしゃべり〉の意味は、オトガイにも見られ、方言資料ではさらにアゴ、アギなどの語にも確認される。また、アゴ、アゴタについては、方言資料によれば前者を〈歯莖〉〈魚のえら〉、後者を〈魚のえら〉の意味で使う地域がある。

以上のような関連意味項目のうち、今回の調査では次の項目を取り上げることにした。〈下顎の脇〉〈下顎の角〉〈上顎〉〈顎全体〉〈歯莖〉〈動物の顎〉〈魚のえら〉〈へらず口をたたく〉〈おしゃべりする〉。なお、108・109図と重複することになるが、一連の顎の細部を尋ねる項目との関係で、〈下顎〉と〈下顎の先〉も調査項目に入れた。

さて、その他、関連形態項目として、次の2つを取り上げた。まず、にわのりの〈蹴爪〉。中世末から近世初頭、顎のアゴがアゲから語形変化して成立するにあたっては、〈蹴爪〉を意味するアゴからの類形牽引が一つの要因として関与していると推定された。したがって、方言上両者の分布相の関連が興味深い。次に、〈足〉に関連する項目。108・109図に現れるアグは、方言資料で、例えばアグオツルのように使われ、〈歩く〉ことを意味する地域がある。しかも、その地域は顎のアグの地域と重なったり隣接したりしていると予想され、やはり類形牽引が両者の間に起こったことが考えられる。このことについては、以下の一連の形式と意味を提示し、使用を確認した。〈歩く〉ことをアグオツル、〈一歩歩く〉ことをヒトアグアルク、〈大腿で歩く〉ことをオーアグデアルク、また、アゴについても、〈歩数を数える〉ことをアゴフム、〈またぐ〉ことをアゴム。なお、〈蹴爪〉と〈足〉は共に体の一部である点、関連形態項目とはしたものの、〈顎〉との意味の関連が全く存しないわけではない。また、〈蹴爪〉と〈足〉に関連する一連の項目は、詳しい説明は省略するが129図〈踵〉の関連意味項目でもある。

(5) 〈眉毛〉の関連意味項目

『日本言語地図』111図の質問文を引用すれば、次のようである。「(絵を示して)目の上に生えている、これのことを何と言いますか。」この質問文を見ると、「生えている」という表現により、眉毛の毛の部分¹を強調する形となっている。このことからすると、調査者がどれだけこの質問文に忠実に調査を行ったかは問題としても、一応〈毛としての眉〉にあたる言い方が聞き出され、地図化されたことになる。

ところで、この地図にはマユゲやマイゲなどケのついた形と、それらより劣勢であるもののマユやマイのようなケのつかない形が見られる。これらの語は、文献においても〈毛としての眉〉の用法をもつが、同様に、例えば次のような〈部位としての眉〉の用法ももつ。「眉皺寄て」(野ざらし紀行)、「^{まゆ}眉に毛有て」(爰かしこ)。そして、この用法は、マユやマイなどケのつかない語形の方に目立つ傾向がある。また、特にマユには〈眉墨としての眉〉の

用法も文献には見られる。これらの用法を方言の上でも詳細に調査すれば、マユゲ・マイゲとマユ・マイの分布勢力に用法に応じた変化が予想される。

次に、この地図にはマゲ、メゲ、マヒゲという語が現れるが、文献ではこれらの語形が〈眉毛〉を表した例を見ない。ところが、古辞書を中心にわずかではあるが、〈まつ毛〉を意味すると考えられるマゲ、メゲそれからメノヒゲという語形が認められる。このように、方言と文献とでマゲ、メゲなどの語に意味の不对応が観察されることになる。ただし、方言資料では、マゲ、メヒゲを〈まつ毛〉として記載している地域もあるから、それらの語の分布状況を確認し、〈眉毛〉の意味での分布との関連を知りたい。

続いて、この地図にはマミ、マミエという語も見られる。文献ではマミが〈目つき〉〈目もと〉〈目〉の意味で使われていて〈眉毛〉を指した例はなく、マミエは〈眉毛〉もあるが他に〈目つき〉〈顔つき〉などの意味ももつ。また、マミアイという語は、文献では〈眉毛〉の意味のみであるが、方言資料では〈眉間〉の意味で使用する地域もある。

その他、イトマイ、ヤマという語もこの地図には出現するが、文献ではイトマユが〈糸のように細い眉〉、ヤママユが〈山の稜線のように美しい眉〉など特定の眉を表す語として用いられている。

さて、以上の関連意味項目のうち、今回は〈部位としての眉〉〈眉墨としての眉〉〈まつ毛〉〈目つき〉〈目もと〉〈顔つき〉の各項目を調査することとした。なお、〈目つき〉以下の項目については、マミ、マミエという語形を提示し、意味を選択してもらう方式をとった。また、〈部位としての眉〉〈眉墨としての眉〉の項目は、『日本言語地図』の〈毛としての眉〉との違いが明確になるよう質問文を工夫した（51ページの調査票参照）。

(6) 〈踝〉の関連意味項目〔文献2〕

『日本言語地図』128図にはツブリブシやツボブシなど一連の語形が見られるが、それらは文献のツブシ、ツブシなどツブブシ類から生じたものと考えられる。この文献のツブブシ類も〈踝〉の意味を中心としていたが、中世末には〈膝頭〉を指すと説明する文献も現れてくる。一方、方言資料におい

てもツブブシ類が〈膝頭〉を意味する地域が確認され、〈蹠〉のツブブシ類との分布関係が問題となっている。この点については、すでに各地の方言集の記載を集め、〈膝頭〉の方言分布を把握したことがあるが、その結果、〈蹠〉のツブブシ類が近畿中心の分布を示すのに対し、〈膝頭〉のツブブシ類はそれ以西に広がることがわかった。しかし、大まかな把握であったので、東日本に〈膝頭〉のツブブシ類が全く存在しないのかなど、詳しい調査により明らかにすべき課題が残された。

また、古辞書には〈もも〉を表す漢字にツブブシ類の訓を載せるものも存在するが、方言資料によれば、ももの前面つまり広義の〈膝〉をツブブシ類で表す地域もあるという。

次に、同じ地図に現れるクルブシは、文献でも〈蹠〉を表す語であったが、近世には〈手首の関節〉を意味する用法も見られるようになる。一方、方言資料からもクルブシの仲間が〈手首の関節〉を表す地域のあることがわかるし、さらに、ツブブシ類やクルミ、グフシなどの語にも同様のことが言える。特に、ツブブシ類は、〈蹠〉〈膝頭〉〈手首の関節〉のいずれの用法も存在することから、丸みを帯びた〈関節一般〉を意味する語であったことも想像される。また、語源を推定すると、同地図のパンヌサラーは〈膝頭〉、タナブシは〈手首の関節〉を表す地域があっても、不思議はなさそうである。

その他、ガブに対応する文献のカブには古く〈頭〉の意味があり、方言資料では〈膝頭〉を指す地域も存在する。また、コブは文献ではもちろん〈こぶ(瘤)〉を表すのが普通である。

以上のような関連意味項目のうち、今回の調査では次の項目を取り上げた。〈膝頭〉〈膝(ももの前面)〉〈手首の関節〉〈こぶ〉。このうち〈こぶ〉については、〈ほくろ〉の関連意味項目のところでふたたび言及する。なお、128図に現れる他の有力な語形としてキビスがあるが、この語は文献では主に〈踵〉を表していた。カガト、アグドについても同様である。しかし、〈踵〉はすでに『日本言語地図』129図として分布が明らかにされているので、あらためて調査項目とはしなかった。

(7) 〈ほくろ〉の関連意味項目〔文献13・14・15・17〕

『日本言語地図』133図は〈ほくろ〉のうち小さいものを、134図は大きいものを対象としている。まず、両図にはフスベという語が見られるが、これは文献では主に〈こぶ〉を表し、〈いぼ〉〈あざ〉〈ほくろ〉を意味することもあったと考えられている。また、フスベからの変化形と推定されるホソビには、方言資料で〈そばかす〉を指す地域も認められるし、ヘソビ、ヘスピには〈銅墨〉の意味も見られる。

次に、やはり両図に現れるクロボシは、方言資料で〈蹠〉の意味で使用される地域が存在する。

続いて、133図にのみ現れる語では、まずソバカスが文献では〈そばかす〉の意味をもっており、方言資料では〈にきび〉や〈あばた〉を表す地域があるという。また、オモガネは方言資料で〈そばかす〉の意を載せるものがあり、さらにこのオモガネと対応する文献のオモカニは、顔にできる〈はれもの〉〈ふきでもの〉〈そばかす〉の類を表す語であった。また、オモクサも文献上オモカニと同様の意味をもち、方言資料で〈そばかす〉の意が見られる。この他、シミという語は、文献で〈しみ〉つまり、年をとると顔にできる薄茶色のはん点を表している。

最後に134図を中心に現れるイボは、文献上主に〈いぼ〉を意味する語であったが、〈あざ〉を表すと認められる例も存在する。

さて、以上のような関連意味項目のうち、今回は次の項目を調査することとした。〈そばかす〉〈しみ〉〈はれもの〉〈ふきでもの〉〈こぶ〉〈いぼ〉。このうち、〈はれもの〉と〈ふきでもの〉については、オモガネ、オモカニ、オモクサの3語形を提示し、上の2つの意味で使用しないかのみ尋ねることとした。

なお、133・134図の両方に現れるアザは、文献でももちろん〈あざ〉の意味を中心としており、また上で述べたようにフスベ、イボにも〈あざ〉の意味が認められる。したがって、〈あざ〉は〈ほくろ〉の重要な関連意味項目であるが、すでに『日本言語地図』132図としてとられているので、あらためて採

用することはしなかった。クロボシの〈罫〉についても同様である。

(8) 〈籾殻〉と〈糠〉の関連意味項目〔文献8〕

『日本言語地図』171・172図にはヌカという語が共通して現れる。しかし、両図を総合した173図によっても、〈籾殻〉と〈糠〉の両者を共にヌカと呼ぶ地点はほとんどないと言ってよく、例えばアラヌカとヌカ、ヌカとコヌカのように使い分けられている。ところが、文献では少なくとも中世までは、ヌカが〈籾殻〉と〈糠〉の両方を指した例が見られ、総称として用いられていた可能性が考えられる。また、近世に入ってから、地方の農書にはそのようなヌカの存在を指摘できる。したがって、171・172図では自然に両者の区別を強調するような形で調査がなされたため現れにくかったことと思われるが、実際にはそれぞれの名称他に〈籾殻と糠の総称〉としてのヌカをもつ地域が存在するのではないかと予想される。さらに文献には、米以外の麦や粟など他の穀物の実の皮についてもヌカが使用される例もあり、その意味でのヌカの分布も興味深い。また、方言資料からは、〈おがくず〉や〈馬の飼料〉の意味でヌカを用いる地域もあることがわかる。

次に、〈籾殻〉の171図に出れるスクモについては、文献によればさらに〈泥炭〉や〈^{あじ}葦や^{かや}茅などの枯れ草〉の意味があり、一説には〈葦の根〉や〈浜にうちあげられた海草などのくず〉を指したとも言う。また、農書には〈麦穂のくず〉あるいは〈麦の実の殻〉を呼んだと考えられるスクボの例もあり方言資料によれば現代でもスクモをそのような意味に使う地域が確認できる。中央の文献から見る〈籾殻〉の名称の変遷においても、スクモの位置づけが今一つはっきりしないところがあり、あるいはもともと脱穀の発達しない穂首刈りの時代における〈稲穂のくず〉を表す語だったのではないかと想像される。さらに、〈こまかい砂や土〉や〈土の中にいるせみの幼虫〉のスクモ、スクボも方言資料に載せられており、以上を総合して考えると、とにかく自然界における微細な不用物の名称にスクモ、スクボが使われていることに気づく。

続いて、同じく171図にはモミという形も見られるが、文献ではモミは〈籾〉

を意味することを主としており、方言でも〈靱〉の意味のモミの分布が広いと予想される。両方の意味のモミの分布関係が注目されるところである。

最後に、〈糠〉の172図に現れるサクズは、文献では特に入浴時に用いる〈洗い粉としての糠〉を指したと考えられ、さらにさかのぼれば、同じ用途の〈豆の粉〉を表すのが本来であったと認められる。方言資料においても、〈浴用の糠袋〉の意味でサクズを用いる地域が見られる。さらに、同地図に現れるチョーズノコにも同様のことが言え、もともと〈洗い粉としての豆の粉〉の意味であったものが、同じ用途の糠をも指すに至ったと考えられる。ただし、サクズの場合には一般の〈糠〉を表した例も存在するのに対し、チョーズノコは文献上そのような用法をもたなかったようである。

さて、以上述べてきた〈靱殻〉と〈糠〉の関連意味項目のうち、今回は次の項目を取り上げた。まず、〈靱殻と糠の総称〉を項目としたが、これはヌカという語形のみを限定して提示し、靱殻と糠をまとめてヌカということがあるかどうか質問した。なお、この質問との関連において、171・172図とは重複することになるが、〈靱殻〉と〈糠〉もあらためて調査項目とした。また、米以外の穀物にもヌカが使われないかどうかを知るために、麦について、靱殻にあたる〈麦の実の殻〉、糠にあたる〈^{ふすま}麩〉を項目として取り上げた。さらに、スクモ、スクボの様々な意味を知るために、語形を提示し、以下の意味で用いないかを尋ねた。〈靱殻〉〈麦の実の殻〉〈稲穂のくず〉〈麦穂のくず〉〈葦や茅などの枯れ草〉〈葦の根〉〈浜にうちあげられた海草などのくず〉〈泥炭〉〈こまかい砂や土〉〈土の中にいるせみの幼虫〉。

さて、以上の項目の他に、関連意味項目という観点からははずれるが、筆者が興味をもつ次の3項目も今回の調査に加えることにした。

つくつくぼうし（せみの一種）〔つくし244図との関連〕

ぼうふら（蚊の幼虫）〔かぼちゃ180図との関連〕

しいな（よく実ってない靱）

前者2つが関連形態項目である。まず〈つくつくぼうし〉は、『日本言語地

図』244図〈つくし〉に現れるツクツクホーシの成立に、文献上〈つくつくぼうし〉のツクツクホーシ、ツクツクホーシからの類形牽引が指摘されているため、取り上げた項目である〔文献12, 126ぺ〕。同様に、180図〈かぼちゃ〉のポーフラには、〈ぼうふら〉のポーフリやポーフラが、類形牽引と同音衝突という形で関与したと認められるため、〈ぼうふら〉の名称の分布を調べようとしたわけである〔文献3〕。

最後の〈しいな〉は、今まで述べてきたような関連意味および関連形態項目という観点からはまったく離れ、近世の方言分布が農書という各地の俚言を反映した資料から比較的豊富に知られるために、それと現代との対比を行い、数百年間の分布の推移を明らかにしようと思図して採用した項目である。そのような項目は他にも調べたいものがあるが、今回は〈しいな〉のみを取り上げた〔文献8〕。

3. 調査方法

3.1. 質問形式と参考語形

3.2. に掲げる調査票をご参照いただきたい。質問は、例えば1番の〈まつ毛〉の項目のようにいわゆる謎々式を主とし、回答者に、参考語形を手がかりにしながら自分の俚言を記入してもらおう方式をとった。この謎々式では説明を助けるために、やはり1番の質問のように絵を添えたものもある。

ところで、『日本言語地図』に現れた語形が文献あるいは方言で他の意味でも使われており、その意味での分布状況を知りたいだけならば、問題の語形を提示し意味を尋ねる形式で十分だとも言える。しかし、その結果からは、問題の語の意味変化の様子を知ることはできても、同じ意味を表す他の語形との歴史的関係が不明になってしまう。筆者としては、語史を考える場合、名称の変遷を中心とし、その名称として使われた語の語形変化や語義変化をも視野に入れることにより、別の名称変化との交渉を明らかにしようと考えているので、特定の語の意味変化のみがわかっても、実は十分ではない。そこで、意味を固定し、謎々式によってその意味に対応する語形全体を求め

ることとしたのである。

しかし、この方式では問題となる語の関連意味をいちいち項目として立てるため、関連意味が多い場合には、調査項目がかなりの数にのぼってしまう。そこで、そのような場合には、先に述べたように特定の語形にしぼられることになってしまうが、逆に語形を示してその意味を確認してもらう方式をとった。そのような項目は具体的には、調査票の4, 5, 19, 40番の項目である。また、謎々式で尋ねても的確な回答が期待されにくいと思われる場合には、調査票の7, 23, 26, 31, 36番の質問のように、これこれの意味でこれこれの語形を使わないかというポイントをしぼった質問形式を採用した。

さて、謎々方式の質問には参考語形を付した。これは、2.1.で述べた文献や方言資料から、歴史的に用いられた語形と現在各地で使われている俚言形を拾い出し、掲げたものである。その他、次にあげる主として江戸時代の方言関係書からも語形を追加した。『物類称呼』『本草綱目啓蒙』『御国通辞』『仙台言葉以呂波寄』『仙台方言』『方言達用抄』『浜荻(仙台)』『浜荻(庄内)』『荘内方言攷』『常陸方言』『志不可起』『ところ言葉』『尾張方言』『加賀なまり』『かたこと』『丹波通辞』『浪花方言』『新撰大阪詞大全』『秋長夜話』『他所問答』『筑紫方言』『浜荻(筑紫)』『菊池俗言考』『混効験集』。また、農業関係の項目では、近世の農書からも必要な語形を補った。ただし、参考語形の数が多すぎるときには調査票のスペースをとり、また回答者にそれを読み通す負担をかけることになるので、適当に選択して掲出することにした。例えば、1番の〈まつ毛〉の場合、バチバチゲ・パッパッゲ・パチパチゲという類似形があったが、このうちバチバチゲを代表として掲出した。

ところで、このような参考語形を提示すると、回答者がそれに引きつけられた回答をする恐れがある。今のバチバチゲの例で言えば、パチパチゲを使用する人でもバチバチゲを答えてしまう可能性がある。また、自分の使用語彙ではなく耳にしたことのある理解語彙まで回答されることも考えられる。しかし、共通語化が進み老年層においてさえ俚言を口にしなくなりつつある現在、参考語形によって回答者の記憶を刺激し、かつて使用した、あるいは

現在も使用するが劣勢になりつつある俚言を思い出してもらうことは必要だと考えた。特に、語史構成を目的とした今回のような言語地理学的調査の場合には、共通語に侵食される以前の俚言の、いわばきれいな分布を知る必要があるからなおさらである。先に述べたような危険性にもかかわらず、参考語形を示すことにしたのは、一つにはその点を重くみたためである。

その他、回答者には、回答に際して調査票の表紙見返し「記入のしかた」にあるような注意を指示した。このうち、1番の注意について説明を加えるならば、この調査においては子供のころ使っていた俚言を思い出し、なるべく古い語形を回答してくれるようお願いした。これは、このように注意することにより、共通語形の回答をおさえ、俚言について内省する姿勢をうながそうと考えたためである。また、文献との対照を考えると、今まさに絶滅しかけているような俚言も含めて、文字通り少しでも古い俚言を採集したかったからでもある。しかし、その目的を徹底させるためには、回答者の父母や祖父母のことばについても思い出せる範囲で記入してもらうなど、さらに工夫を行う必要があったと考える。

3.2. 調査票

使用した調査票を次のページ以下に掲載する。「方言記入票」と題した調査票は、表紙を含めて12ページからなり、1ページ目がフェイスシート、2ページ目が記入上の注意、3ページ以降が質問項目となっている。ここでは縮小して示したが、実物はB5版で15級活字を用いている。各項目と質問文については、すでに2.2.と3.1.で説明したので、ここではあらためて述べることはしない。

3.3. 通信調査法の利用

この調査は、通信調査法によって実施した。通信調査法は、回答の質および確実性の点などで面接調査法に及ばず二次的手段とみなされているが、広範囲を短期間にしかも少ない費用で調査できる点は評価されてよい。今回は、全国にわたる広い地域を対象としており、しかも科学研究費(奨励研究)による調査ということで費用的にも時間的にも制限があったため、面接調査

記入のしかた

1. できるだけ古い方言をお教えてください。したがって、現在は使わなくとも、子供のころ使っていた方言をご記入ください。なお、共通語しかないときは、それを記入してください。
2. 方言は、カタカナで発音通り記入してください。
例 デーコン(大根)、クワジ(火事)、アシェ(汗)
3. 質問によっては、全国各地で使われていると思われる方言を **参考** としてあげたものもあります。それらを参考にして、ご自身の方言を思い出し、記入して下さい。
4. 方言が2つ以上あるときは、その違いについて次のようなことがわかれば書きそえてください。
 - ① 意味が全く同じかどうか
 - ② どちらが古いか新しいか
 - ③ どちらをよく使うか
 - ④ どちらが上品か下品か
 - ⑤ 大人のことばか幼児のことばか

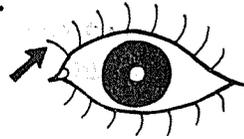
1. 目のふちに生えている毛(下の絵の矢印)を何と言いますか。

参考 マゲ・メゲ・マヒゲ・マンゲ・メヒゲ・メノヒゲ・

メノケ・バチバチゲ・ホコトリゲ・マツゲ・マスケ・

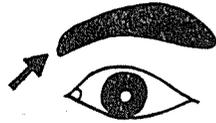
マツヒゲ・ミマチギ・ミースマチ・ミマツチャ

[]



2. 目の上に、への字に毛の生えているところ(矢印のところ)を何と言いますか。

[]



3. 女性の場合、上の2番の質問と同じ部分をそってしまい、すみで書く人がいます。そのとき、何を書くとか、何を引くとか言いますか。

[]

4. マミということばを、次のような意味で使いませんか。あてはまるものに○をつけてください。あてはまるものがないときは、「その他」のところにどんな意味か、ご記入ください。マミ ということばを使わない人は、「使わない」に○をおつけください。

ア. 目つき、まなざし

オ. その他

イ. 目もと、目のあたり

[]

ウ. 目、まなこ

エ. 顔つき

カ. 使わない

5. それでは、マミエ ということばはどうですか。同じようにお答えください。

ア. 目つき、まなざし

オ. その他

イ. 目もと、目のあたり

[]

ウ. 目、まなこ

エ. 顔つき

カ. 使わない

6. ひとくちに顔と言っても、いろいろな意味があります。次のような意味の場合、どんな言い方をしますか。（参考方言は、最初にまとめてかけます。）

参考 カオ・オモ・オモテ・ウムチ・ツラ・チラ・シラ・ツラツキ・カタチ・ツラクセ・カマチ・カバチ・ミバナ・ミメ・メメ・カンバセ・ホタクレ

- ① 顔面の意味 例えば、「毎朝 ～ を洗う」というときの ～ の部分。

[]

- ② 人相の意味 例えば、「どんな ～ か忘れた」というときの ～ の部分。

[]

- ③ 表情の意味 例えば、「おどろいた ～ をする」というときの ～ の部分。

[]

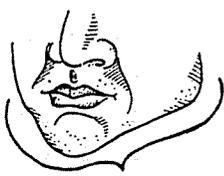
- ④ 器量の意味 例えば、「あの娘はきれいな ～ をしている」というときの ～ の部分。

[]

7. 顔だけでなく、体全体の姿やスタイルのことを、カオ と言うことはありますか。例えば、姿の美しい女性について、「カオが美しい」という言い方はしませんか。あてはまる方に○をつけてください。

ア. する

イ. しない

8. 人間の顔で、下の絵の  のところを何と言いますか。共通語で「あご」というところです。

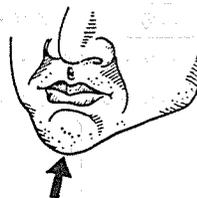
参考 オトガイ・オトゲー・ウトッゲー・ウトイ・アギ・アギト・アギタ・アゲ・アゲト・アゲタ・アゴ・ウワアゴ・シタアゴ・アゴサキ・アゴタ・アグ・カマチ・カバチ・カマゲタ・フガマツ・カクチ・カージ・カップ・チャイ・エラ・ウワクモ・クチノナカ

[]



9. それでは、特に、矢印のあたりのつきでたところは何と言いますか。(参考方言は前ページの8番の質問のところを見てください。

特に名前がなければ、「なし」とご記入ください。)



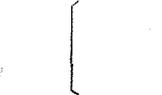
10. 特に、わきの のあたりには何と言いますか。(参考方言は8番のところ。

特に名前がなければ「なし」と記入。)



11. 特に、矢印のあたりの角ばったところは何と言いますか。ここのほりだし

ている人もいます。(参考方言は8番のところ。特に名前



12. 口の中で、上側のかたいところは何と言いますか。餅がくっついったりする

ところです。(参考方言は8番のところ。)



13. 8番の質問のところと、12番の質問のところを合わせて、あごの骨格全体

を何と言いますか。(参考方言は8番のところ。)



14. それでは、人間ではなく、動物のあごのことは何と言いますか。人間と同

じでもご記入ください。(参考方言は8番のところ。)

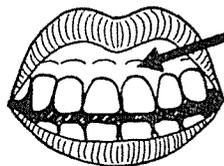


15. 歯の根もとをおおっている肉（下の絵の矢印）のところを何と言いますか。

参考 アギ・アゴ・アグラ・ハグラ・ハグ・ハグキ・ハグイ・ハブキ・

ハブ・ハブシリ・ハブシ・ハジシ・ハンシ・

ハゴシシ・ハギシ・ギシ・ネジ・パサシ

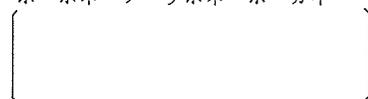


16. 人間の顔で、下の絵の矢印のところの骨を何と言いますか。ここの骨の
っばっている人もいます。

参考 ホーゲタ・ホゲタ・ホーガマチ・フガマツ・

ツラガマチ・ツラカバチ・カマチ・カバチ・カマボネ・

ツラボネ・ホーボネ・フーツボネ・ホーカイ



17. へらざ口をたたいたり、口答えをしたりすることをどう言いますか。例えば、
アゴタラタタクとか、ホーゲタラタタクなどと言う地方がありますが、あな
たの土地ではどうですか。

参考 アゴタラタタク・アゴタラナラス・アゴタラツク・アゴラタタク・

アゴラユウ・アゴガスギル・アゴガオオイ・アギトラナラス・アギラホス・

オトガイラタタク・オトガイラナラス・オトガイラツク・オトガイラハク・

オトガイニスギル・ホーゲタラタタク・ホーゲタガスギル・エラガスギル・

カバチラタタク・カバチラタレル・カバチラツク・カバチラキク・ハゲムク・

ハゴムク



18. それでは、余計なおしゃべりをするをどう言いますか。（参考方言は
上の17.番をごらんください。）



19. カマチとかカバチとかいうことばを使いませんか。あてはまるものに○をつけてください。

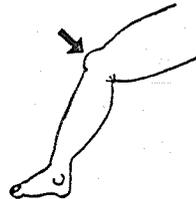
ア. カマチを使う イ. カバチを使う ウ. どちらも使わない

「使う」と答えた方は、どんな意味で使うか、次の中からいくつでも○をつけてください。あてはまるものがないときは、「その他」のところにどんな意味かご記入ください。

- | | |
|------------------|------------------|
| ア. あたまの骨格 | カ. 戸やしょうじのわく木 |
| イ. ほおからあごにかけての骨格 | キ. ゆかのはしにわたす化粧横木 |
| ウ. 上下のあごの骨 | ク. 荷車などの両側につけるわく |
| エ. ほお骨 | ケ. ふち, はじ, すみ。 |
| オ. くち | コ. その他 |

20. 足の関節で、下の絵の丸くでっぱったところ(矢印)を何と言いますか。

参考 ツブシ・ツブシ・チブシ・スブシ・チグシ・チンシ・ヒザツブシ・
 ヒザブシ・モモノフシ・アワタ・アワダコ・ヒザカワラ・ヒザカブラ・カブ・
 ヒザカブ・ヒザコーベ・ヒザコブ・ヒザノホネ・ヒザサラ・サラ・ヒダツノ・
 ヒザッタマ・ヒザガシラ・ヒザコゾー・ヒザポーズ・ヒザボン・オポーサマ・
 スネポーズ・スネボン・スネカバチ・モモッコゾー・
 ゲンロク・チャンボ・ヒザ・スネ・スネコ・カガマ・
 エビラ・オトビラ・マスネ・ムコボシ・ムムニ



21. それでは、右の絵で——のところは何と言いますか。

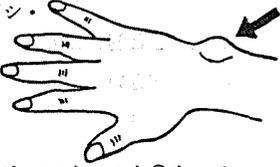
(参考方言は上の20.番をごらんください。)



22. 手首の関節で、下の絵の丸くでっばったところ(矢印)を何と言いますか。

参考

クルブシ・クロボシ・クロコボシ・コブ・グフシ・ツブシ・ツブシ・
ツクブシ・ツクルブシ・ツノコブシ・ツボムシ・ツブナギ・テブシボネ・
テブシ・クルミ・トリコノフシ・ウメボシ・モモブシ・
モモザネ・キビス・タナブシ・グルグル・イシナゴ



23. 次にあげるような言い方をしませんか。する場合は、いくつでも○をつけてください。もし、他に似たような言い方があれば、下にご記入ください。

- ア. アグラ ツル (意味は、あるくということ)
- イ. ヒトアグ アルク (意味は、一歩あるくということ)
- ウ. オオアグデ アルク (意味は、大またであるくということ)
- エ. アゴ フム (意味は、何歩あるか数えるということ)
- オ. アゴム (意味は、またぐということ)
- カ. どの言い方もしない。

[
]
(
)

24. 顔などにできる、茶色の小さい点々を何と言いますか。年ごろの色白の女性の目のまわりによくできます。共通語で、「そばかす」というものです。

参考

フスベ・ホソビ・ヘソビ・オモクサ・オモガネ・オモカニ・ゴマカス・
チャカス・フスマカス・ハイノクソ・ヒカネ・ヨメアザ・クロボシ・アザ・
ホクロ

[
]

25. 年をとると、皮ふがおとろえ、顔などにうす茶色のはん点ができることがあります。それを何と言いますか。共通語で「しみ」というものです。

[
]

26. 顔にできる、はれものとか、ふきでもののことを、オモクサとか、オモガネとか、オモカニとか言いませんか。あてはまるものに○をつけてください。

ア. オモクサと言う。

ウ. オモカニと言う。

イ. オモガネと言う。

エ. どれも言わない。

もし、同じ意味で似た言い方があればご記入下さい。

[]

27. 打ちみや病気などで、体の表面の一部がもりあがったものを何と言いますか。共通語で「こぶ」と言うものです。

参考 フスベ・グーフ・コンタブ・チヌ・ダンゴ

[]

28. 皮ふの表面に、ほんのちょっとしたでっぱりができることがあります。それを何と言いますか。共通語で「いぼ」というものです。

参考 フスベ・ヒスパー・クツベ・クンビー・ヒンネ・イビラ・ホクロ

[]

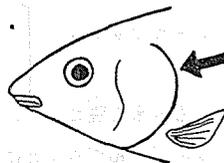
29. 魚の呼吸するところを何と言いますか。下の絵の矢印のところです。

参考 アギ・アギト・アゴ・アゴタ・アグ・イゲ・エギ・エゲラ・エラ・

オサ・カゲ・カバ・カマジ・ササミ・ビム・ビューマ・

フギ・ハブ

[]

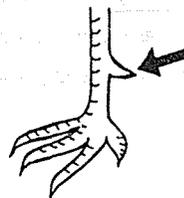


30. にわたりの足にある、右の絵のつきでたところを何と言いますか。

参考 アゴエ・アゴイ・アグイ・アゴ・スルジ・ツルジ・

ケン・ケン・カケヅメ・ケヅメ

[]



31. 人間の頭の毛のうずまきを、ツムジとか ツジ とか言いますが、牛や馬などのうずまきのように生えた毛も、ツムジとか ツジ とか言いませんか。あてはまるものに○をつけてください。

ア. ツムジと言う イ. ツジと言う ウ. どちらも言わない

もし、他の言い方があれば
ご記入ください。

32. せみの一種で、夏のなかばから鳴き、羽はすきとおっていて、鳴き声がつくつくホーシとか、オーシーつくつくと聞こえるせみを何と言いますか。

参考 ツクツクホーシ・ツクツクポーシ・クツクツホーシ・ツクズクヨーシ・
ジュクジュクヨーシ・ツクツクヨス・ツクンビョーシ・ツクズクシ・
ツクシヨシ・ウツクシヨシ・ツクシコイシ・ツクシヨーセミ・ツクシシヨー・
ホツシヨーズク・ホツチョー・クツコーシ

33. 水たまりにいる蚊の幼虫のことを何と言いますか。赤っぽい色をした小さな虫で、からだをまげたりのぼしたりして泳ぎます。

参考 ボーフリムシ・ポーフリ・ポーフラ・ポームシ・ボンボラムシ・
ドンブリ・アマザコ・アミヌクワ・カネマ・カノコ・キングョミミズ・
シリフリムシ・テンテンムシ・ハイラク・ピンピンムシ・ヘタヘタ・ミズムシ・カヤリンコ

34. もみ米を脱ぐくし、玄米にするときにとれるからを何と言いますか。卵やりんごの箱づめなどに使います。

参考 スカ・ニカ・アラスカ・モミスカ・スリスカ・サラスカ・サヤスカ・
モミサヤスカ・スクモ・スクボ・スクブ・ヌカスクボ・スクモヌカ・ワリフネ・モミガラ・モミ・オーバ・ホヤ・ヤタ・ウムナゲ

35. 玄米を精白し、白米にするときにできるかすを何と言いますか。つけ物などに使います。

参考 スカ・コスカ・コノカ・コンカ・コメスカ・ヒスカ・テスカ・テノコ・
チョーズスカ・チョーズノコ・チョイノコ・サクズ・サクジ・マチカネ・ノシ

36. それでは、上の 34.番と 35.番の質問の二つのものを区別せずに、ひっくり
めてスカと言うことはありませんか。あてはまる方に○をつけてください。

ア. ひっくりめてスカと言うことがある。

イ. 必ず区別して、別々の名前で呼ぶ。

37. 次に、麦についてお聞きします。麦の実のから、つまりちようど米のもみ
のからにあたるものを何と言いますか。

参考 スカ・ムギスカ・アラスカ・スクボ・スカスクボ・ハジカ・ハシカ・
ハシカスカ・ハクボ・ムギホクボ・オーバ・ホヤ・ポーシ

38. それでは、麦を粉にひくときにでるかすを何と言いますか。家畜のえさに
使ったりします。

参考 スカ・サクズ・カラコ・カラコノカス・ショーフカラ・フカス・モミ
ジ・モミジノコ

39. 十分に実らず、皮ばかりで実のない米のことを何と言いますか。

参考 シイナ・シイナセ・シイネ・シイダ・シビタ・シブタ・シンダ・シイラ
・シエラ・シラ・シビラ・シエ・アイ・イカシ・ガシン・カセ・スセ・バツパ
・バツトー・ミオサ・ミヨセ・メウシ・カシラ・ヨナドリ・アラモト・
ホシケタ・ガシントノコメ

40. スクモとかスクボとかいうことばを使いませんか。あてはまるものに○をつけてください。

ア. スクモを使う イ. スクボを使う ウ. どちらも使わない

「使う」と答えた方は、どんな意味で使うか、次の中からいくつでも○をつけてください。あてはまるものがないときは、「その他」のところにどんな意味かご記入ください。

- | | |
|--|----------------|
| ア. もみ米のから | キ. 浜にうちあげられた |
| イ. 麦の実のから | 海草などのくず |
| ウ. 稲こきをしたあとに残る
稲の穂のくず | ク. 泥 炭 |
| エ. 麦こきをしたあとに残る
麦の穂のくず | ケ. こまかい砂や土 |
| オ. 葦 <small>あし</small> や茅 <small>かや</small> などの枯れ草 | コ. 土の中にいるせみの幼虫 |
| カ. 葦 <small>あし</small> の根 | サ. その他 |

41. 山の頂上ちやうじやうのことを何と言いますか。

参考 ツムジ・ツジ・ツジ・ツザ・テンツジ・テンカツジ・テンコツジ・
テンズシ・シンツジ・マツツジ・テヘン・テッペイ・テッペン・テッペチ・
テヘツ

42. 道が十字に交差しているところを、何と言いますか。

参考 ツムジ・ツジ・シノーノツジ・ヨツツジ

●ご協力ありがとうございました。回答が済みましたら、
お手数でもこの記入票を、返信封筒に入れて、ポストに
ご投函ください。

法をとらず、通信調査法を採用することにした。

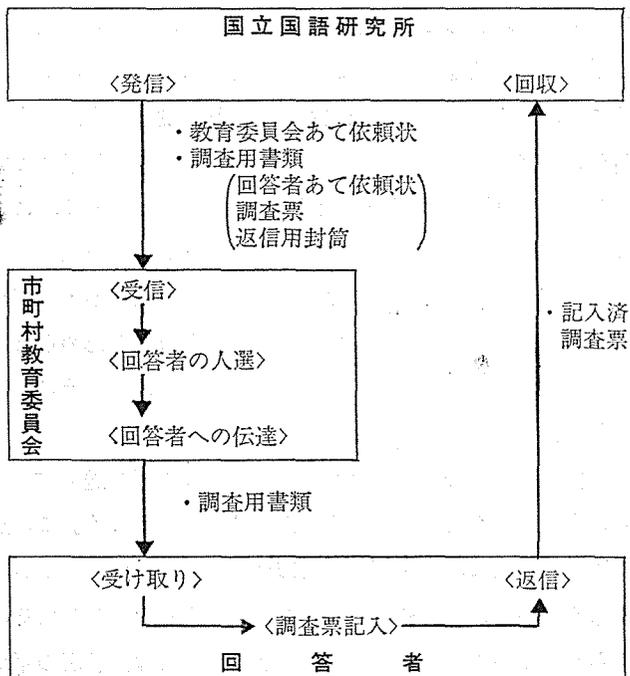
ただし、通信調査法と一口に言ってもいくつかの方式が考えられ、それらの間で結果に違いの現れることが予想される。また、面接調査法と比べて通信調査法のどんな点が問題なのか、詳しく検討されたこともなかったといつてよい。そこで、この全国調査に先立ち、昭和59年度に岡山県津山市と岡山県全域を対象に、通信調査法の実験的研究を行った。その結果については、一部を報告し〔文献9〕、また今後全体を報告する予定であり、ここでは詳しく述べないが、調査票については葉書ではなく帳面型の調査票を封書で送り、質問は謎々式で行い、参考語形をあげる形式が、回収率・回答欄のうまり方・俚言の回答率のいずれからみても最も有効な方法と認められた。したがって、今回の全国調査においてもすでに述べた通り、ほぼその形式を採用することにした。

ところで、実際の調査においては回答者に直接調査票を送ることはできず、回答者の人選などを行ってもらい協力機関が必要となる。この点については、先の実験的研究で、中学校など協力機関の職場内部の高齢者職員から回答してもらい方法と、協力機関に適当な老人の人選をお願いしてその人から回答してもらい二つの方法を試みたが、前者の場合には回答者の平均年齢が若すぎるといふ問題がでてきたこともあって、後者の方法をとることにした。

さて、今回協力をあおいだ機関は全国各市町村の教育委員会であり、そこに回答者の人選を依頼した。いくつかの候補の中で、教育委員会がこのような仕事に最も理解を示してくれるだろうと考えたためである。各教育委員会には、63ページに掲げるような国立国語研究所長名の依頼状により、調査の主旨や人選してもらい回答者の条件を説明した。そして、同封の回答者あて依頼状・調査票・返信用封筒の3点を、選定した回答者に渡してくれるようお願いした。また、回答者に対しては、64・65ページに示す回答者あての依頼状「方言調査についてのお願い」の中でやはり調査の主旨を説明し、調査票の質問に回答の上、返信用封筒に入れて送り返してくれるよう協力を依頼

した。

以上、調査の流れを図示すれば次のようになる。なお、この手順では、調



調査の流れ

査票は回答者から直接送り返されることになっているが、実際にはふたたび教育委員会を経由し、教育委員会が公文書をそえて返送してくれる場合もあった。また、中には教育委員会の職員が、回答者に面接して聞きとり調査を行った例もあり、教育委員会には予想以上に負担をかけたようである。

なお、回答者とその担当教育委員会には礼状を送った。何らかの記念の品物をさしあげることも考えられたが、これくらいの規模の調査ならば、それなしでも協力いただけるだろうと期待したこと、および費用の上で余裕のなかったことなどから品物はやめ、礼状に謝意をたくすことにした。

ところで、以上の通信調査法による結果の回収率は、実は予想を下回るものであった。そこで、未回答の地点については教育委員会に対し、回答者へ

教育委員会 御中

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

(公印省略)

拝啓 時下ますますご清栄のことと、お慶び申し上げます。

さて、国立国語研究所では全国の方言について調査・研究を行っておりますが、このたび、失われつつある日本全土の方言を今のうちに収集するために、全国2,000地点について郵便による方言調査を計画いたしました。

つきましては、お忙しい中恐縮ですが、お手数でも回答者として下記の条件に合う適当な方1名を、地元からご選定いただき、その方に同封の「方言調査についてのお願い」・「方言記入票」・返信用封筒の3点をお渡しくださいますようお願い申し上げます。

- ご当地（同市町村内）に生まれ育ち、成人してからもほとんど
- 他市町村に出たことのない方
- 男性の方
- 65歳以上の方。古い方言を知りたいので、回答可能なかぎり高齢の方をご選定ください。

誠にごめんどうなお願いですが、なにとぞご協力くださいますようよろしくお願い申し上げます。

敬 具

※なお、不明の点がございましたら、下記にお問い合わせください。

〒115 東京都北区西が丘3-9-14

国立国語研究所

言語変化研究部第一研究室

TEL 03 (900) 3111 内線232

教育委員会あて依頼状

方言調査についてのお願い

昭和61年3月1日

ご協力くださる皆様へ

国立国語研究所
言語変化研究部第一研究室

拝啓 突然のお手紙で失礼いたします。

さて、国立国語研究所は、日本語についての国の研究機関ですが、その仕事の一つとして全国の方言についての調査・研究を行なっております。このたび、失われつつある日本全土の方言を今のうちに収集するために、全国2,000地点の皆様へ、こちらから質問紙をお送りし、ご自分の方言についてお教えいただく仕事を行なうことになりました。

つきましては、ご多忙中とは存じますが、「方言記入票」の説明にしたがって、ご自分が子供のころ使っていた（あるいは現在も使っている）昔ながらの方言を記入し、返信用封筒に入れてご返送くださるようお願い申し上げます。結果は、右の方言地図のような形でまとまる予定です。なお、研究以外に結果を使用することはございませんので、ご安心ください。

それでは、誠にぶしつけなお願いで申しわけございませんが、なにとぞご協力くださいますようよろしくお願い申し上げます。

敬 具

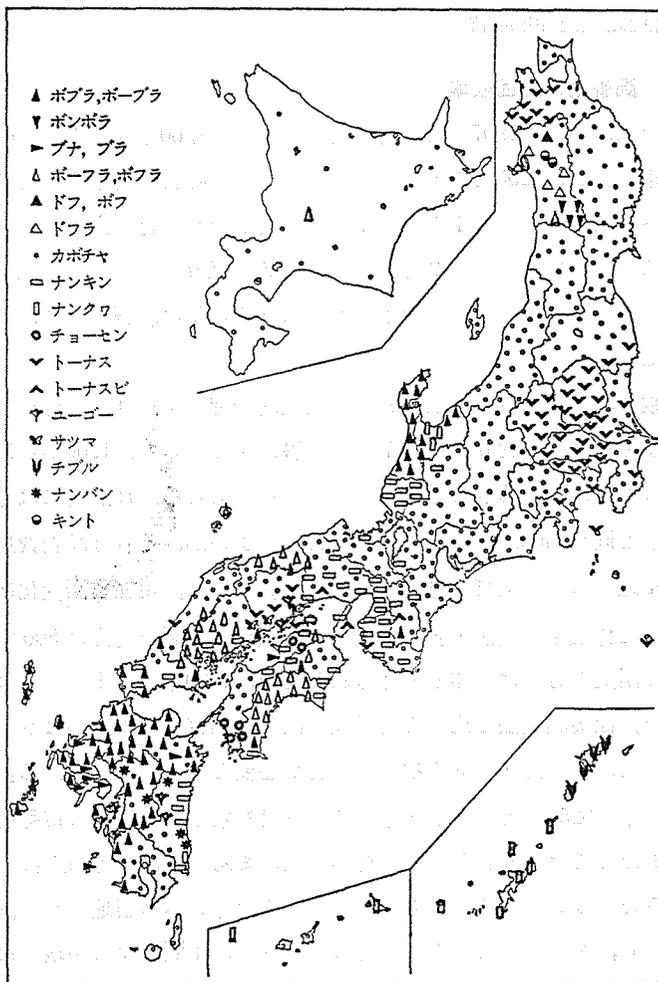
※なお、不明の点がございましたら、下記にお問い合わせください。

〒115 東京都北区西が丘3-9-14

国立国語研究所
言語変化研究部第一研究室
TEL 03 (900) 3111 内線 232

回答者あて依頼状

「かぼちゃ」の全国方言地図



この地図は、「かぼちゃ」を全国各地で何と言うか、記号で表したものです。

の確認を行うことなどあらためて協力を要請するために催促状を送った。この点については、後に詳しく述べたい。

4. 調査地点と回答者

4.1. 調査地点と回収率

調査票は、全国で1907の市町村に配布した。昭和60年4月1日の時点で、全国の市町村数は3253であるから、約6割弱の市町村を対象としたことになる。回答者は原則として1市町村1名を指定したが、特に面積の広い市町村については、地域を指定し2地点ないしは3地点分の回答者をお願いしたところがある。したがって、調査予定地点数（依頼した回答者の数）は全国で2040となった。

この数は、先に述べた通信調査法の実験的研究〔文献9〕で得られた回収率の数値をもとに、約6割から7割の回答が戻るとして、1200から1400地点の分布図が描けるだろうと予定した数である。もちろん理想的には『日本語地図』と同じ2400地点の回答が得られればよいが、それは調査費用の面でも後の整理の労力の面でも難しいと考えた。しかし、現在言語変化研究部第一研究室で作製中の文法・表現法関係の全国地図の調査地点は800であり、それより語彙の分布は複雑と考えられるため、1000地点を下りたくはなかった。また、面接調査法と比べて通信調査法では俚言の回答率がどうしても低くなるので、その意味でも千数百の回答が必要と考えたわけである。

さて、全国3253の市町村から今回の調査で対象とした1907の市町村を選定するにあたっては、それらの市町村が全国にまんべんなく等間隔に配置されるようなバランスを第一に考えた。この点は『日本語地図』と同じである。ただし、また、都市部の市町村は少な目に、山間部など僻地の市町村は多目に選ぶという配慮も加えた。例えば、東京都では西部の山間部地域と島嶼には調査地点が多く、東部の都市化地域には少ない。これは、多少でも古い俚言の残りそうな地域を積極的に調査したいと考えたためである。また、沖縄は全国的な視野からみても古い俚言を残す傾向があると思われるため、

全市町村を対象にした。逆に、北海道は開拓の歴史が新しく、その分布は一応中央語史を推定するための分布の範囲外にあると判断したので、選定した市町村の割合は極端に低い。

次のページに、調査を予定した地点数を都道府県別に示した。また、以下に話題にする回収率についても、あわせて都道府県別に掲げてある。

次に、この通信調査の回収率について述べる。調査票の発送は、昭和61年3月5日に行い、約半年後の9月1日現在では1390通が回答されてきている。これは、配布した2040通のうちの68.1%にあたる数である。

ところで、先にも触れた通り、回収の途中で教育委員会あてに催促状を送っている。その発送日は、調査票の発送から約3ヶ月後の6月9日であるが、それまでの回収率は、1123通、55.0%であった。この数字は、最初予定した6割から7割の回収率にかなり及ばないものと判断したため、もう少し回答を増やすべく催促状を送ることに決めたわけである。この催促状の効果はどうであったかという点、6月10日以降9月1日までの約3ヶ月間の回収率は、267通、13.1%であった。また、6月9日までに未着であった917通を母数にすれば、そのうちの29.1%があらたに戻ってきたことになる。

結局、最終的な回収率の68.1%は、最初の3ヶ月間の55.0%と催促状後の3ヶ月間の13.1%を足した数字ということになる。なお、最初の回収率が、先に述べた実験的通信調査の回収率である6割から7割の数値に及ばなかった理由としては、主に次の2つが考えられる。

ア. 質問内容が、実験的調査のときに比べて複雑であった。つまり、今回の全国調査では、関連意味項目が中心となり、似通った内容の質問が連続するため、回答者にしつこさを与えたのではないかと思われる。また、質問方法もいくつかの方式を併用したため、回答者がとまどったことも考えられる。

イ. 調査時期に問題があった。すなわち、3月は、協力機関の教育委員会にとって、年度末の多忙な時期であると同時に、人事異動の時期でもあり、このような調査の実施に理解と責任をもってもらうには余裕

都道府県別調査地点数・回収率

都道府県	市町村数 (60.4.1 現在)	調査対象 市町村数	調査予定地点数				回 答 地点数	回収率 (%)
			1地点の 市 町 村	2地点の 市 町 村	3地点の 市 町 村	合 計 地点数		
北海道	212	58	58			58	33	56.9
青森	67	59	52	7		66	47	71.2
岩手	62	59	47	11	1	72	41	58.3
宮城	74	46	40	6		52	31	59.6
秋田	69	58	47	10	1	70	53	75.7
山形	44	42	31	9	2	55	38	69.1
福島	90	68	63	3	2	75	50	65.3
茨城	92	44	42	2		46	32	69.6
栃木	49	38	33	5		43	35	81.4
群馬	70	38	36	2		40	26	65.0
埼玉	92	24	23	1		25	19	76.0
千葉県	80	28	27	1		29	23	79.3
東京都	41	19	16	3		22	14	63.6
神奈川県	37	18	16	1	1	21	14	66.7
新潟	112	69	66	3		72	55	76.4
富山	35	28	26	2		30	18	60.0
石川	41	31	30	1		32	21	65.6
福井	35	25	24	1		26	14	53.8
山梨	64	26	24	2		28	14	50.0
長野	121	78	78			78	52	66.7
岐阜	100	58	55	3		61	47	77.0
静岡県	75	45	44		1	47	36	76.6
愛知県	88	42	42			42	30	71.4
三重	69	39	38	1		40	33	82.5
滋賀	50	21	20	1		22	17	77.3
京都	44	28	25	3		31	19	61.3
大阪	44	15	15			15	11	73.3
兵庫県	91	55	55			55	42	76.4
奈良	47	27	25	1	1	30	24	80.0
和歌山	50	32	32			32	25	78.1
鳥取	39	25	22	3		28	23	82.1
島根	59	42	41	1		43	27	62.8
岡山	78	50	50			50	38	76.0
広島	86	51	49	2		53	34	62.3
山口	56	40	38	2		42	33	78.6
徳島	50	28	27	1		29	21	72.4
香川	43	18	18			18	12	66.7
愛媛	70	40	40			40	28	70.0
高知	53	39	35	4		43	28	65.1
福岡	97	34	34			34	18	52.9
佐賀	49	19	19			19	14	73.7
長崎	79	42	42			42	27	64.3
熊本	98	48	46	2		50	36	72.0
大分	58	41	39	2		43	28	65.1
宮崎	44	40	36	3	1	45	29	62.2
鹿児島	96	79	77	2		81	54	65.4
沖縄	53	53	47	2	3 (5地点 1)	65	26	40.0
合 計	3,253	1,907	1,790	103	13 (5地点 1)	2,040	1,390	平均 68.1

のない時期であったかと思われる。催促状を送ってみてわかったこと
 だが、前任者との引継ぎが十分でなかったなどの理由で調査票の所在
 が不明となっているケースがかなり見られた。

このうち、後者の理由については、こちらの配慮不足であることが明らか
 で、今後の反省点となった（なお、調査票の所在が不明であることがわかっ
 た市町村には、あらためて調査票を送付した）。

その他、教育委員会あての依頼状で、実験的調査の際には所長の公印をい
 ちいち押したのに対し、今回は枚数の都合で省略せざるをえなかったが、公
 的な文書であることの信頼性という点で、それが回収率に微妙な影響を与え
 たこともなかったとは言えない。

また、左の都道府県別の回収率の表を見て気づく通り、沖縄県の回収率が
 40.0%と低かった。これは、沖縄の特殊な発音を一般の片仮名表記で記入し
 てもらふことに難点があったことが一つの原因と考えられるが、さらに理由
 があるのかもしれない。今後、熟慮すべき点である。

4.2. 回答者の条件と実際の回答者

先にも述べた通り、回答者は原則として1市町村1人とした。

どんな人を回答者として指定するかは、63ページに掲げた教育委員会あて

	今 回 調 査	『日本語地図』
性 別	• 男性	• 男性
年 齢	• 65歳以上、回答可能なかぎり高 齢の人。	• 調査終了時(昭和38年)、満60歳以 上の人。高齢者は避け、満70歳ぐ らいまでの人。
在 外 歴	• 同市町村内に生まれ育ち、成人 してからほとんど他の市町村 に出たことのない人。	• 生まれてから満15歳まではよその 土地(他の市町村やよその ^{おき} 字)で 生活したことのない人。それ以後 よそで生活したとしても、その期 間が3年以内の人。
そ の 他		• 職業、学歴、階層などあまり特殊 でない人。 • 老化のはなはだしい人は避ける。

依頼状に示した通りである。その条件を、『日本言語地図』のインフォーマントの条件〔文献1, 24～26ペ〕と対比する形で前のページに整理する。

今回の調査の結果は、分布地図の形で『日本言語地図』の関連項目の地図と比較することをめざしているので、回答者の条件は、基本的には『日本言語地図』に従うことになる。しかし、今回は通信調査による制約のため『日本言語地図』の条件をそのまま採用することはせず、条件を多少緩めたところもある。以下、今回の条件について説明を加える。

まず、性別については男性を対象としており、この点は『日本言語地図』と同様である。

年齢については、下限が『日本言語地図』より5歳上がっており、しかも、上限が『日本言語地図』では高齢者を避けているのに対し、今回は逆に高齢者を要求している。これは、できるかぎり古い方言を知りたいと考えたからであり、『日本言語地図』時代と比べて寿命の伸びた今日、年齢の条件を高くしても調査可能だろうと考えたためである。また、『日本言語地図』の分布との比較を重視した場合、当時のインフォーマントは今回の調査終了時（昭和61年）で83歳以上の人ということになり、なるべくそれに近づけるためにも「回答可能なかぎり高齢の人」という条件を付したのである。

在外歴については、『日本言語地図』の趣旨に添いながらも、具体的な在外期間の制限をつけなかった。これは、『日本言語地図』のようなきびしい条件では、人の移動の頻繁になった現在、条件に合う回答者を探し出すことが難しくなりつつあるのではないかと予想したためである。したがって、この点が障害になり、教育委員会の協力を得られないことを恐れた。また、『日本言語地図』では字の単位おざで在外歴を制限しているが、今回は市町村単位で考えることにした。これは、今述べたような理由の他、今回の場合、ほぼ1市町村に1人の回答者であるため、同じ市町村内での移動に神経質にならずに済むからである。

その他の条件のうち、位相的な条件には今回全く触れなかった。協力機関の中で、特に教育委員会から紹介してもらいインフォーマントには、土地の

文化人など教養の高い人が選ばれる傾向があるというが、今回の調査のような比較的内省力の必要な内容で、しかも自分で記入する方式の調査では、むしろそのような人の方が適当かとも考えた。ただし、その点を強調することはしなかった。

また、老化の点についても当然とみなし触れなかった。老化の内容として『日本言語地図』では耳の遠い人、発音の不明瞭な人などをあげるが、これらの人は面接には不向きでも、もし内省力のすぐれた人ならば、今回の調査では回答者となりうる。

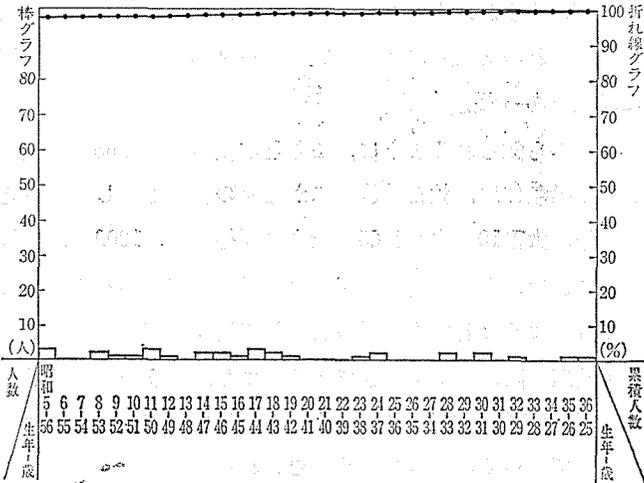
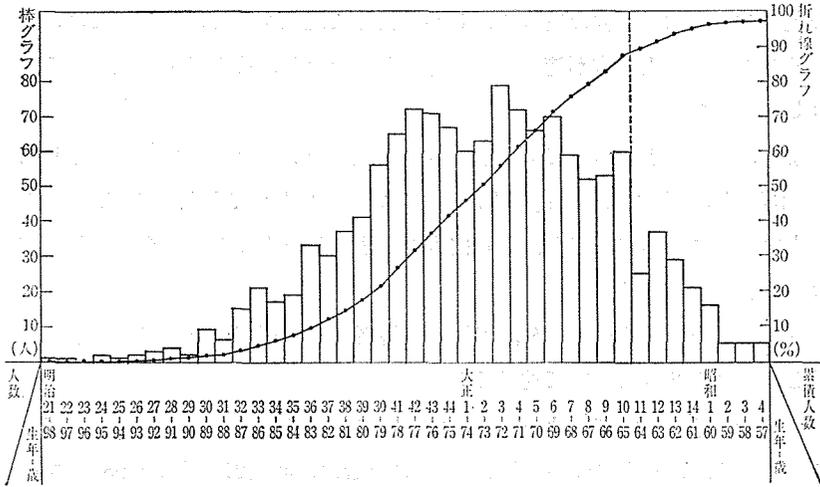
さて、以上のような条件を、実際の回答者がどの程度満たしているか、年齢と在外歴の2点について述べる。

まず、年齢について、次のページに回答者の年齢分布を示す（生年不明の6件を除く、1384人について集計）。最高齢者は、明治21年生まれ98歳の人であり、逆に昭和36年生まれ25歳が最も若い回答者であった。その間の開きは73年もある。しかし、高齢者で明治20年代生まれはわずかであるし、一方昭和以降の生まれの人も極端に少なくなっている。大体の回答者は明治30年代から大正年間にも生まれた人たちである。特に、棒グラフを見てわかる通り、大正3年生まれあたりに回答者数のピークがある。全体の回答者の平均年齢は72.5歳であった。

以上のことから知られるように、こちらが指定した「65歳以上の人」という回答者の年齢条件は、教育委員会にかなりの程度配慮してもらえたものと言える。実際、大正10年生まれ65歳以上の回答者は、1209人、全体の87.4%であった。これは、ある程度満足すべき結果とみてよからう。もちろん、昭和以降生まれのような若い人が回答者として選ばれてしまったことは、今後の調査結果整理の際に留意すべきである。また、もう一つの条件である「回答可能なかぎり高齢の人」という点については、かならずしも教育委員会に十分考慮してもらえなかったように思われる。

ところで、『日本言語地図』のインフォーマントの生年は、平均で明治27年であり、現在92歳になる人々を対象としている。したがって、今回の調査

回答者の年齢分布



の回答者とは年齢で約20年の開きがあることになる。この間の俚言自体の変動はわずかなものであろうが、共通語化により分布の密度が薄められたり、あるいはわずかな分布が消滅に追いこまれたりしている可能性には注意を払う必要がある。

次に、在外歴については、条件をかなりゆるめたためもあってか、比較的こちらの希望にそった回答者が得られた。フェイスシートでは、具体的に、小学校卒業までの居住地と、その後の居住地の2点に分けて在外歴を尋ねているが、回答者の方言形成に決定的影響を与えると思われる前者の点については、約93%の人が地元の小学校を卒業したと答えている。もちろん、残りの7%約100人の回答結果をどう扱うかは問題となろう。

その他、性別についてはフェイスシートに記入欄を設けなかったため明らかかなことはわからないが、名前から判断するかぎりでは、指定通り男性が圧倒的である。

5. 調査費用

この調査に要した費用は、総額で847080円であった。以下にその内容を示す。この費用を面接調査の事例、例えば研究所が最近行った文法・表現法関係の全国調査などと比較することもできるが、今は、心覚えのために用途と金額を記すのみにとどめる。

品 目	単 価	数 量	金 額
印刷費			
調査票 (B5版, 12ペ)	40円	2100部	84000円
教育委員会あて依頼状 (B5版)	7.8円	2100枚	16380円
回答者あて依頼状 (B4版)	10.5円	2100枚	22050円
往信用封筒 (長3型封筒代込み)	7.5円	2100枚	15750円
返信用封筒 (長3型封筒代込み)	7.5円	2100枚	15750円
催促状 (官製はがき代込み)	51.1円	900枚	46000円
教育委員会あて礼状 (官製はがき代込み)	48円	1600枚	76800円
回答者あて礼状 (官製はがき代込み)	49円	1400枚	68600円
小計			345330円

通信費

往信用切手〔1市町村1地点の場合〕	70円	1790枚	125300円
〔1市町村2地点の場合〕	170円	103枚	17510円
〔1市町村3地点以上の場合〕	240円	14枚	3360円
返信用切手	70円	2040枚	142800円
再送付分切手(注1)(往復)	140円	77件	10780円
			小計 299750円

アルバイト謝金(注2)			
調査票発送作業	4400円	23人日	101200円
	4000円	7人日	28000円
催促状発送作業	4550円	5人日	22750円
礼状発送作業	4550円	11人日	50050円
			小計 202000円
			合計 847080円

注1 調査票の紛失などの理由で、あらためて調査票の送付を要求してきた教育委員会への送付代(返信用も含む)。

注2 発送作業には筆者も加わったので、アルバイト謝金イコール発送作業の人員費の総額というわけではない。

なお、この費用は主として、文部省昭和60年度科学研究費補助金による。

おわりに

『日本語地図』の第1巻が刊行されてから21年、全巻が完結してから13年がたとうとしている。その間、この地図集はいくつかの目的に利用されてきたが、研究所が掲げた当初の目的の一つである日本語の歴史の解明という面では、主に個々の地図の通時的解釈が、反省すべき点を多く含みながらも、比較的活発に行われてきた。筆者も、文献国語史との対照の上で語史を編もうとする際、この地図を解釈し利用してきた。

しかし、その作業を通じて逆に語史の構成がこの地図集に拘束されている面のあることを感じた。文献上の用例が、意味的用法の上でも文体的特徴の上でも幅広いものが得られているのに、それと比較すべき言語地図が意味や文体の点で限定を加えられているのは、せっかくの視野がせばめられる思いがした。今回の分布調査は、そのような資料的拘束から一歩でも抜け出るこ

とを意図したものである。もし、『日本言語地図』が言語地図自体としても発展すべきものであるとしたら、今回の調査はそのような発展の一つとして位置づけることが、許されるかもしれない。

それにしても、こうした俚言の分布を明らかにする調査はあと何年可能であろうか。この点について詳しく検討したことはなかったが、各地で作られているグロットグラムを見渡すかぎり、俚言を比較的よく残すのは大正生まれ以前の人々で、昭和生まれの人々には共通語化の波が急速に及んでいるように思われる。ということは、悲観的に見てあとわずか二、三十年ほどが俚言調査の期待できる期間にすぎないということになる。

俚言の全国分布が日本語の歴史を投影した鏡であることを思うとき、徳川宗賢氏がその俚言分布の崩壊を国宝級文献の焼失になぞらえたのは至当に思われる。また、「日本語の歴史に関心のある研究者は、ここしばらくは文献のほこりを払う手を一時休めて、組織的な方言資料収集に専心してはどうか」という同氏のことばも、筆者の耳には皮肉ではなく真摯なものとしてひびいてくる〔文献15〕。

それでは、組織的な方言資料収集のためにはどのような方法がありうるか。研究所のこれまでの経験からは、『日本言語地図』や現在作成中の文法・表現法関係の言語地図同様、地方研究員の方々の協力をあおぎ、面接調査を実施することが最上であろう。できればその方法をとりたい。しかし、それでは調査の実施に相当の年数と費用のかかることを覚悟しなければならない。そこで、今回のような通信調査法も候補の一つとして浮かび上がるが、質量ともに十分な資料を得るためには、回答者の吟味など方法上の工夫がさらに必要となってくる。

そして、それら調査法の検討にもまして、今回きわめて不徹底ながら試みた関連意味項目の洗い出し作業のような、明確な目的にそった組織的な項目の選択も目下の重要な課題であろう。

参考文献

1. 国立国語研究所『日本言語地図解説——方法——』（昭和41年3月）
2. 小林隆「文献と方言分布からみたくくるぶし(踝)の語史」（『国語学研究』22 昭和57年12月）
3. 小林隆「語誌一かぼちゃ(南瓜)」（『講座日本語の語彙9 語誌I』昭和58年1月, 明治書院）
4. 小林隆「〈顔〉の語史」（『国語学』132 昭和58年3月）
5. 小林隆「〈顎〉を意味する語の歴史」（『文芸研究』105 昭和59年1月）
6. 小林隆「文献国語史と『日本言語地図』の解釈——〈頬〉の語史を例に不一致の問題を考える」（『新しい方言研究』昭和59年5月, 至文堂）
7. 小林隆「変化の要因としての語彙体系」（『国語学研究』24 昭和59年12月）
8. 小林隆「農書からみた近世の方言分布——〈糠〉と〈粃穀〉を例に——」（『国語学』140 昭和60年3月）
9. 小林隆「方言通信調査法の検討」（『言語生活』411 昭和61年2月）
10. 小林隆「文献国語史と言語地理学の対照による語史構成の方法」（『国語論究1 語彙の研究』昭和61年5月, 明治書院）
11. 小林隆「古語ツムジの復活——みやこの移動と名称の変遷」（『言語生活』423 昭和62年2月）
12. 小林好日『方言語彙学的研究』（昭和25年11月, 岩波書店）
13. 柴田武「言語地理学の方法と言語史の方法」（『ことばの研究』2 昭和40年3月）
14. 徳川宗賢「言語地理学と言語史」（『文科系学会連合研究論文集』20 昭和45年3月）
15. 徳川宗賢「文献国語史と方言」（『日本の方言地図』昭和54年3月, 中公新書）
16. 日野資純「基礎語の地理的分布と語彙史の交渉——「家^イ」と「家^{ウツ}」の並存をめぐって——」（『静岡大学人文論集』33 昭和58年2月）
17. 福島邦道「黒子か痣か」（『方言研究年報』13 昭和45年11月）
18. 前田富祺『国語語彙史研究』（昭和60年10月, 明治書院）特に第2部Ⅲ
19. 前田富祺「言語地理学から国語史へのアプローチ——踵の呼び方をめぐって」（『国語学』119 昭和54年12月）

〔付記〕本報告には次の成果を含む。文部省昭和60年度科学研究費補助金による奨励研究(A)「文献資料と方言分布の対照による語史構成のための基礎的研究」（課題番号60710250）。